

令和2年度指定

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

(プロフェッショナル型)

# 研究開発実施報告書

【3年次】



兵庫県立佐用高等学校

# 目 次

## 巻頭言

- 1 令和4年度研究開発計画書（文部科学省提出資料）
  - （1）実施計画
  - （2）令和2年度新規指定時の研究開発概要
  - （3）研究開発の実施体制
  - （4）目標設定シート（計画時）
  - （5）学校設定科目に関する説明資料
  - （6）事業概要図
  
- 2 研究開発の内容
  - （1）地域との連携の推進による生徒の資質・能力を育成
  
  - （2）生徒が主体的な学びをするための指導方法の工夫
  
  - （3）指導に生かす評価の研究～「指導と評価の一体化」に向けた取組～
  
- 3 委員会等実施報告
  - （1）コンソーシアム委員会実施報告
  - （2）運営指導委員会実施報告
  
- 4 3年間の成果と課題
  - （1）アンケート結果
  - （2）目標設定シート（報告時）
  - （3）令和4年度成果概要図
  
- 5 資料  
令和2年度生実施教育課程表  
新聞記事

## 研究指定を終えて

兵庫県立佐用高等学校長 西坂 美樹

本校家政科は、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業【プロフェッショナル型】」の研究指定校に選ばれ、令和2年度から令和4年度まで3年間、『食』を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成 ～佐用風土（S a y o F o o d）を活用したモデルプランの構築～」に取り組みました。

思い起こせば3年前、文部科学省の研究指定校の採択が決定し、令和2年度から本事業に向けた取り組みを実践しようと、意気揚々として、計画をしていた矢先、日本国内に新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、事業の取り組みどころか、学校自体がかつてない2ヶ月間の長期の臨時休業になってしまいそれどころではなくなっていました。社会の中では「ステイホーム」でとにかく家に居ることが求められました。その間、学校はもちろん、社会の機能は大きく後退、停止してしまいました。私たちの生活様式も手洗い、消毒はもちろん、徹底して3密（密集、密閉、密接）を回避することが求められました。6月より学校再開に至りましたが、佐用高校の伝統行事である「塔陵祭」は中止、体育大会は短縮、部活動関係の大会はほとんどなくなりました。これ以後も学校教育活動は大きな制限を受け、マスクや手洗い、換気といった基本的な感染症対策に加え、感染拡大リスクが高い3密を徹底的に避け、「新しい生活様式」を取り入れた、学校生活に変貌していきました。

本事業も、新型コロナウイルス感染拡大防止の影響を受け、予定を大きく変更せざるを得ませんでした。特に、地域の行事やイベント、交流活動が縮小や中止になり、生徒の発表の場や活躍の場がなくなってしまったことは残念でなりません。しかし、そのような厳しい環境の中でも、地域の皆様や関係機関のご支援やご協力を得ながら、取り組みの3本柱である「地域活性化のための商品開発」「健康寿命の延伸」「安全安心なまちづくり」について、工夫を凝らしながら精一杯取り組みました。そして、令和4年10月青森県で行なわれた全国高等学校産業教育フェアにて、その成果を発表させていただくことができました。生徒達が明るく笑顔で自信に満ちた表情で3年間の自らの学びを語る姿に、生徒達の目を見張る成長と向上的な変容が認められ、本事業に取り組んだ大きな成果を感じ取ることができました。

特に本事業の実施方針として、生徒の主体的な学びを身につけさせるため、教員はそれぞれの取組ごとにPDCAサイクルで回していく際、P「共に考え待つ」D「共に行動し見守る」C「共に振り返り褒める」A「共に改め期待する」の姿勢で臨むことを確認し、生徒達の自主的、自発的取組を促してきました。その結果、生徒達はどの取組をとっても自ら学び、動き、振り返り、改善してくれました。まさしく、主体的、対話的、深い学びができたと感じています。今後も、この指導方針の下、主体的な学びに向かう力の育成を図っていきたいと思います。

最後になりますが、コンソーシアム委員会に参加していただいたすべての関係機関の皆様に絶大なご協力とご支援をいただき誠にありがとうございました。皆様のご協力なくして本事業を遂行することはできませんでした。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

この3年間ご支援・ご指導賜わってきました文部科学省、兵庫県教育委員会、佐用町、関係大学・専門学校、関係事業所や自治会、各委員の皆様にご改めて心からの感謝を申し上げ、巻頭のご挨拶といたします。

# 1 令和4年度研究開発実施計画書

## (1) 実施計画

### 1 指定校名・類型

学校名 兵庫県立佐用高等学校

学校長名 西坂 美樹

類型 プロフェッショナル型

### 2 研究開発名

「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成 ～佐用風土 (Sayo Food) を活用したモデルプランの構築～

### 3 研究開発の概要

本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安心・安全な町づくりの三本柱で展開している。これまでも特産品を使用した商品開発には取り組んできたが、事業を通じて伝統料理、保存食へと発展させる目的がある。販売が主目的ではなく、「食」を通じて「佐用風土 (Sayo Food)」と地域人材を活用し、健康の見直しや災害時対応などで町を活気づける。その中で、伝統料理や保存食を「高校生訪問サービス」等の実習で高齢者に提供するなど地域と協働するために、履修科目の新規充実を図り、学校設定科目の活用でカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びと地域課題の解決につなげる。

### 4 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用（□で囲むこと）

学校設定教科・科目を開設している

教育課程の特例の活用している

### 5 事業の実施期間

契約日～令和5年3月31日

### 6 令和4年度の研究開発実施計画

#### (1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容

1年目の令和2年度には、基礎作りとして地域についての知識を得る学びを重点的に研究することから始め、カリキュラムの中で様々な基礎知識と基本的な技術を身につけられるよう実施してきた。

2年目の令和3年度には、実践として1年目に習得した知識や技術を使って「給食サービスボランティア」や「高校生訪問サービス」や「佐用合同防災訓練～KIZUNA 大作戦～」など実践的な様々な事業に取り組んだ。

そして3年目となる令和4年度には、2年間で計画実行してきた内容に加え、「地域への還元」をテーマに、これまでに実施した事業での考察や検証をもとに地域の課題解決に向けた提言を行っていく。また、これまで新学習指導要領にもとづいたカリキュラム開発を行っていく中で、生徒の「主体的・対話的で深い学び」につながる内容を吟味し、「生徒に身につけさせたい資質・能力」を明確にしてきたが、これらを具現化し、「指導と評価の一体化」を実現するためにルーブリック評価を活用し、ポートフォリオやレポートを活用した評価の在り

方を研究する。コロナ禍で予測不可能な現状であるが、逆転の発想を持ち、現状の課題を見直す機会を持つことで、生徒の新たな発想を引き出し、課題解決力を身につけさせたい。さらに、本年度から新しい学校設定科目である「フードスペシャリスト」を実施することから、従来の学校設定科目の変更を行うとともに、既存科目の内容見直しなど新学習指導要領に沿うカリキュラム・マネジメントを行う。

なお、課題として、昨年度から引き続き他学科・他教科との連携した教科横断的なカリキュラム・マネジメント体制の構築があげられるため、校内委員会を活用して他学科・他教科とも連携を持ちながら進める。

研究テーマ	主な実施科目名	連携機関
①佐用の特産品を活用 (商品開発)	課題研究 (2、3 学年) ヒューマンサービス (2 学年) フードデザイン (1～3 学年)	佐用町、IDEC、ナニワフード
②佐用で暮らす人を守る (健康寿命の延伸)	生活産業基礎 (1、2 学年) ヒューマンサービス (2 学年) ヒューマンサービスⅡ (3 学年) 生活と福祉 (2 学年) 伝統文化 (3 学年) 課題研究 (2、3 学年) フードデザイン (1～3 学年)	佐用町自治会、美作市スポーツ医療看護専門学校
③佐用の水害から学ぶ (安全・安心な町づくり)	総合的な探究の時間 (1 学年) ヒューマンサービス (2 学年) 課題研究 (2、3 学年) フードデザイン (1～3 学年)	佐用町、山崎高校、日本調理製菓専門学校

研究開発のテーマである三本柱ごとの取組

**【佐用の特産品を活用 (商品開発)】**

この柱では、「生徒に身につけさせたい資質・能力」を表のとおりとし、これらを身につけさせるために、次の①～⑥の内容に取り組む。

1 学年 (探究基礎力)	ふるさと意識、表現力、プレゼンテーション能力
2 学年 (探究実践力)	企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、ふるさと意識、調理技術
3 学年 (探究発展力)	企画力、情報発信力、課題発見・解決力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、ふるさと意識、調理技術

① 総合的な探究の時間 (1 学年：ふるさと意識、表現力)

- ・佐用町を知る「佐用学」での探究活動

佐用町を知る「佐用学」で特産品を含めての佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用しての調べ学習・発表の探究活動を行う。(4月～7月)

② 生活産業基礎 (1 学年：プレゼンテーション能力)

- ・商品開発におけるプロセスについての知識習得 (11月～1月)
- ・地域実態調査

地域に必要な商品、サービス、人材を調査することで、2 学年の「課題研究」で実施する佐用の特産品を活用した商品開発へつなげる意識付けやアイデアの捻出を行う。(9～11月)

③ ヒューマンサービス（2学年：企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力）

- ・「給食サービスボランティア」での特産品を用いた献立開発

佐用町社会福祉協議会との協働で「給食サービスボランティア」の参画を通じて、地域の特産品や本校農業科学科の農作物を用いた献立の開発を行う。（6～12月）

④ 課題研究「食物」（2学年：企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、ふるさと意識、調理技術）

トマトの生産を行う IDEC や商品化するナニワフード、佐用町からは健康福祉課職員や栄養士を招いての協働で「夢茜トマト」、「佐用もち大豆」など、佐用町の特産品を用いての商品開発やレシピを開発する。（4月～1月）

⑤ 課題研究「食物」（3学年：企画力、コミュニケーション能力、ふるさと意識、調理技術）

- ・子育て支援センター「ママプラザ」でのママ支援の食育活動時の地域特産品を用いた商品開発（6月）

- ・地域の古民家を利用した「高校生カフェ」での提供料理に関して、地域特産品を用いた献立開発（通年）

⑥ フードスペシャリスト（3学年：企画力、情報発信力、課題発見・解決力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、ふるさと意識、調理技術）

- ・特産品開発商品の利用方法や調理法の研究
- ・地域の宿泊施設を利用した「高校生レストラン」や郷土料理・保存食・高齢者向け料理教室の開催

#### 【佐用で暮らす人を守る（健康寿命の延伸）】

この柱では、生徒に身につけさせたい資質・能力を表のとおりとし、これらを身につけさせるために、次の①～③の内容に取り組む。

1 学年（探究基礎力）	プレゼンテーション能力、ふるさと意識
2 学年（探究実践力）	調査・分析力、課題発見・解決力、情報発信力、企画力
3 学年（探究発展力）	企画力、コミュニケーション能力、情報発信力、プレゼンテーション能力、ボランティア精神

① 総合的な探究の時間（1 学年：プレゼンテーション能力、ふるさと意識）

- ・佐用町を知る「佐用学」での探究活動

近年、地元生徒の入学が減少していることから「地域探究活動」を実施する。令和3年度に実施した生徒のアンケートからは「佐用町について知らなかった一面を知ることができ、興味関心がわいた。」との意見も多く見られたため、引き続き、佐用町を知る「佐用学」で佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用しての調べ学習・課題解決学習・発表の探究活動を行う。（4月～7月）

- ・佐用町の地域課題に関する調査活動

佐用町の人口や高齢化率の現状を検証、佐用町自治会の協力によるモデル地区の現地調査を行うことにより、佐用町の抱える課題や要望などを調査する。（9月）

② 生活産業基礎（1 学年：ふるさと意識）

- ・生活産業とそれに関連する職業についての知識の習得

生活産業に関連する職業について知るとともに、佐用町に関連する職業等を調べることで、

佐用町の現状や特徴、課題を知る。（5～6月）

- ・地域が求める人材の調査

佐用町の現状を見据えての推測と役場や各施設での聞き取りを実施する。（7～9月）

③ フードデザイン（1学年：ふるさと意識）

- ・「食」に関する応用知識および技術の習得（通年）
- ・食育活動

地域の小学生や高齢者に向けた食育教室の開催を行う。例年実施している佐用小学校との「合同調理実習」では、双方の自尊感情の高まりや自主性の向上が見られる。来年度は、高齢者も含めた多世代交流の場を提供することで、高校生が主体となる行事を企画運営する。

④ 生活産業基礎（2学年：課題発見・解決力）

- ・生活産業にまつわる職業体験（インターンシップの実施）

1学年で学んだ生活産業に関する職業について、実際に地元企業1社につき1人で5日間の就業体験を実施する。その中で、生活産業に関する従事者の仕事について体得するとともに、地域の課題に再度目を向けさせる機会とする。（7月）

⑤ 生活と福祉（2学年：調査・分析力、課題発見・解決力）

- ・健康寿命延伸を目指した福祉分野での体験活動

地域課題である老年人口率が高いことから、高齢者についての学びを深めることや基礎的な介護に関する知識や技術の習得をすることで、佐用町の三大課題である健康寿命延伸に向けた学びを実施する。実施に際しては、美作市スポーツ医療看護専門学校との協働による福祉の基礎学習と介護に関する実習の研修会を行う。これにより、3学年での地域の福祉施設での「介護体験実習」につなげる。また、「認知症サポーター」資格取得を目指すことによる目標の見える化と地域に根ざした人材育成を目指す。（年複数回）

地域の障がい者支援施設を訪問し、レクリエーション交流を通じて、体力づくり啓発活動と食育を行う。例年実施している活動では、レクリエーションによる交流のみであるが、令和4年度は「食」をテーマに掲げることで、健康寿命延伸の観点を取り入れる。（2月）

⑥ ヒューマンサービス（2学年：課題発見・解決力、企画力）

- ・「給食サービスボランティア」を通じた人とのふれあい

佐用町社会福祉協議会との協働で「給食サービスボランティア」の参画を通じて、独居高齢者のサポートを行う。一方行のサービス提供にとどまらず、人とのふれあいにつながるような双方向での実施を工夫する。（5～12月）

⑦ 課題研究「情報」（2学年：情報発信力、企画力）

事業関連の内容を「さようチャンネル」など地元テレビ局や広報誌を通じて佐用高校 全校生徒や佐用町、隣接県への幅広い情報発信を行う。

当初の計画では「ヒューマンサービス」における「高校生訪問サービス」では、直接的な訪問や交流を内容に挙げていたが、新型コロナウイルスによる新しい生活様式をふまえてリモートや往復はがきを用いての実施に計画変更を行う予定であることから、タブレット端末を操作できる人材育成を目指す。

⑧ 子どもの発達と保育（3学年：企画力、コミュニケーション能力、ボランティア精神）

- ・佐用保育園との協働でレクリエーション交流を通じて、子育て支援と食育活動を行う。

例年実施している「ふれあい育児体験」では、生徒自身で交流会を企画運営することで、協調性やプレゼンテーション能力を伸ばしてきた。令和4年度は「食」を掛け合わせることで、エプロンシアターやおもちゃを製作することで園児に対する食育活動に力を入れる。（1月）

⑨ ヒューマンサービスⅡ（3学年：企画力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、ボランティア精神）

- ・「高校生訪問サービス」に向けた調査研究

地域の高齢者世帯へ訪問し、交流をすることで健康寿命延伸に向け食を中心とした生活改善の提言を行う「高校生訪問サービス」を実施。当初の計画での訪問が困難になっているので往復はがきやリモートを活用も計画する。ネットワーク環境や ICT 技術の面で課題が残されているが、学校全体に協力を呼びかけ、教員と生徒がともに知識と技術の向上をするように工夫する。（4～8月）

- ・他地域における情報収集

県境という立地を生かして岡山県や鳥取県で特産品、少子高齢化、防災状況などのアンケート調査を行う。積極的な交流の場として情報の共有と発信を行うことで、課題発見力や解決力の向上を目指す。（9～12月）

⑩ フードスペシャリスト（3学年：企画力、コミュニケーション能力、情報発信力、プレゼンテーション能力）

- ・健康食や保存食の開発やレシピ本を発行する。

・地域の宿泊施設を利用した「高校生レストラン」や郷土料理・保存食・高齢者向け料理教室を開催する。

・昨年度「高校生訪問サービス」での調査統計結果を生かし、データに基づく高齢者の食生活改善の指針を作成する。

⑪ 課題研究「被服」（3学年：企画力、情報発信力、プレゼンテーション能力）

・「さよう文化祭」にて、地元の高齢者施設や佐用保育園、子育て支援センターの利用者と共演し健康寿命の延伸を心と体の面からサポート（11月）

・佐用町の特産物「皆田和紙」を使って小物や服飾製作を行い、佐用町を広報、活性化する活動を実施。（9～11月）

⑫ 課題研究「福祉」（3学年：企画力、コミュニケーション能力、ボランティア精神）

・地域の高齢者施設や障がい者支援施設、保育園や子育て支援センターでの定期的な実習における地域住民の生活サポートと実態調査を実施する。（7月～8月）

⑬ 伝統文化（3学年：コミュニケーション能力）

・地域の方から佐用町の伝統料理についての講義と講習会を受けることで、伝統文化の継承を行う。

・地元の講師による着付けや茶道、華道の指導を受けることにより地域人材の活用につなげる。

【佐用の水害から学ぶ（安全・安心な町づくり）】

この柱では、生徒に身につけさせたい資質・能力を表のとおりとし、これらを身につけさせるために、次の①～⑤の内容に取り組む。

1 学年（探究基礎力）	基礎知識・技術、課題発見力、ふるさと意識
2 学年（探究実践力）	情報発信力、課題発見・解決力、企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力
3 学年（探究発展力）	アイデア力、ボランティア精神、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力

- ① 総合的な探究の時間（1 学年：基礎知識・技術、課題発見力、ふるさと意識）



- ・防災学習

佐用町は平成 21 年の水害被害を踏まえて「災害に強い町づくり」を掲げていることから、佐用町企画防災課職員、西はりま消防署職員の講話により災害についての知識を習得する。

(7月)

- ・佐用町の水害についての調べ学習とポスターセッション (11月)

② フードデザイン (1学年:基礎知識・技術、ふるさと意識)

- ・「食」に関する基礎知識および基礎的技術の習得 (通年)

- ・食育活動 (「クッキング講習会」「パッククッキング講習会」)

地元保育園と協働で地元食材を用いたクッキング講習会を企画し、食育活動を実施する。また、佐用町のいずみ会からの災害食学習であるパッククッキング講習会で防災を通じた食育活動を実施する。(10~11月)

- ・コンテスト参加

学びを深め定着することと企画力や発想力を引き出す機会として、食に関するコンテストを応募する。(通年)

③ フードデザイン (2学年:課題発見・解決力、コミュニケーション能力)

- ・保存食・非常食開発

日本調理製菓専門学校との協働による保存食研修会を実施する。災害に関する事業と横断的なつながりを持たせることを目的とし、缶詰や真空食品の商品開発につなげる。また、これまでに開発した商品を用いてのレシピ開発学習と地域(いずみ会)からの伝統食講習会を実施する。伝統食講習会は従来までも行われてきたが、生徒にはコミュニケーション能力の向上や地域への興味関心が見られるとともに、地域住民も交流を楽しみにしていただき、地域に活力を持たせることから令和4年度も実施する。(9、1月)

④ ヒューマンサービス (2学年:課題発見・解決力、企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力)

- ・科目横断的防災教育(ヒューマンサービスと課題研究(福祉))

「課題研究(福祉)」との横断的なカリキュラム・マネジメントを行うことで「佐用合同防災訓練~KIZUNA大作戦~」企画、実施を行う。家政科2学年が中心となって防災訓練を行うことで、他の生徒にも主体的な行動を促す機会とする。

⑤ 課題研究「福祉」(2学年:情報発信力、課題発見・解決力、企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力)

昨年同様防災訓練を拡大し、地域や専門学校と協働する形で行う「佐用合同防災訓練~KIZUNA大作戦~」に向けて、企画運営を生徒自身で行う。それに伴い、本校普通科、農業科学科生徒には近隣に住む高齢者や幼児の避難誘導を担ってもらうなど、学校全体での取組に発展させることを目的としている。(4月~12月)

地域の保育園や子育て支援施設、高齢者との協働で防災学習を行い、日常からの防災意識を高め、災害時のスムーズな行動への意識づけを行う。生徒には主体的に動く力と「共助」の意識を持たせる。

⑥ ヒューマンサービスⅡ (3学年:アイデア力、ボランティア精神、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力)

- ・減災対策の提言

これまでに培ってきた災害についての知識や技術をもとに、「防災マニュアルブック」や地域の「ハザードマップ」を作成し、全校生徒や地域住民に配布をする。また、合同防災訓練時に地域住民に向けて、減災についての講義や簡易防災グッズ製作の体験活動を行う。

## (2) 学校家庭クラブ活動の活用

学校家庭クラブの基本方針である「創造」「勤労」「愛情」「奉仕」の精神を柱として、地域に貢献する目的で「研究活動」「ボランティア活動」「交流活動」を行う。

- ・「ふれあいの里上月」にて地元食材を用いた焼き菓子の定期販売を通して、地域の活性化を行う。(5月～3月)

- ・佐用町、上月町、三日月町など地元主催のイベントにおける地元食材を用いた焼き菓子の販売活動を通じた地域交流(11月～12月)

- ・「兵庫県総合文化祭」「西播磨高校生マルシェ」などの県内学校関係イベントで開発商品や特産品使用の焼き菓子販売・皆田和紙アクセサリ製作の体験活動を通じて、佐用町のPR活動(11月～12月)

## (3) 県外の先進的な取組の研修を通じた、地域協働の深化と検証

県外の本事業を先進している家庭に関する学科設置校の研究発表会に参加することや、東京都健康長寿医療センター研究所での研修に参加することで、新たな知識を得るとともに本校での事業への参考とし、より深い地域との協働へとつなげる。

- ・東京都健康長寿医療センター研究所にて健康寿命延伸の具体的取組を学ぶ、佐用町の課題を相談し、指導助言をいただく。(5月)

## (4) カリキュラム・マネジメントの推進

これまで校内組織「地域協働部」を中心に、ビジョン委員会、教育課程委員会、キャリア教育推進委員会と連携・協働して、地域との協働の中での学びを行う授業の「ヒューマンサービス」等の教育内容や「インターンシップ」「高校生訪問サービス」「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動の充実に向けた協議・検討を行い、地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランの構築に取り組んできた。

令和2年度は、緊急事態宣言に伴う臨時休業のため、事業開始や組織構築が大幅に遅れたり、活動に制限が加わったりしたが、感染対策等に留意しながら、できる範囲内で探究活動に取り組んだ。事業の実施に際しては、職員会議等での連絡・報告等を通して全職員の周知理解と情報共有を行い、生徒の探究活動に対して全ての教職員が積極的に関わっていく体制作りを推進していった。全教職員の協力のもと、「インターンシップ」や「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動を実施・成功できたことは、その成果の現れである。

令和4年度は、これまで2年間三本柱ごとに実施してきた内容を各科目の目標達成の視点から捉え、事業実施に向けて科目毎の連携を明らかにしていく。また、目標に対するPDCAサイクルを確立させていく。加えて昨年度は、三本柱の中で「安全安心なまちづくり」の部門でのみ他教科との連携として「減災WEEK」を設定できたが、他の二本の柱でも他教科連携を行う。

令和3年度に、それぞれ計3回のコンソーシアム委員会および運営指導委員会が開催されたが、委員会での研究開発、事業内容、組織体制等に関する指導助言を、探究活動にできるかぎり反映し、コロナ禍でも実施できる活動内容を模索していった。令和4年度もこの経験を活かし、コンソーシアム委員会および運営指導委員会での指導助言を参考にしながら、4月からのスタートに向けて準備を行い、佐用町との連携を軸に学校全体で研究開発を行う体制を整え、よりよい探究活動に取り組む。

## (5) 成果の発表・普及

### ① 「さよう文化祭」にて研究成果の披露

毎年11月に行われる「さよう文化祭」では、地域の方々と共演のファッションショーを実施するとともに、地元特産品を使用した焼き菓子の販売を行ってきた。令和3年度は、

コロナウィルス感染拡大のため、残念ながら中止となってしまったが、令和4年度は、3年間の研究成果の発表の場として開発商品や研究内容の発表等を行う。

② 校内発表会の開催

校内にて研究成果の発表会を行うことで、次年度の校内連携体制の確立と職員全体への協力体制の確認を行う。(1月)

③ さよう文化情報センターでの発表会の開催

地元の施設を利用して研究成果の発表会を行うことにより、研究内容を地域等に還元し、次年度につなげる。(2月)

④ 普通科への成果の普及

現在、令和4年度からの新教育課程実施に向け、これまでの取組成果を生かし、普通科の選択科目で家庭科と農業科の専門科目を導入し、3学科連携のカリキュラム・マネジメント構築に向けた取組を行う。

(6) 成果の評価・検証

研究成果の評価として、生徒によるポートフォリオの作成やパフォーマンス評価、学力調査、アンケート調査などを通じて三つの柱(佐用の特産品を活用、佐用で暮らす人を守る、佐用の水害から学ぶ)において生徒に身につけさせたい力が定着しているかを多面的に評価する。

研究成果の検証としては、佐用町の住民やコンソーシアム関連機関各所へのアンケートや意識調査を通して、次年度への検証とする。

(7) 報告書の作成

本年度の調査、研究、発表の成果として報告書の発行を行い、近隣高等学校や家庭に関する学科設置校、地元の学校、連携機関に配布し事業成果の還元を図る。

7 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
①佐用の特産品を活用 (商品開発)	校内、佐用町、まなび舎農園、ナニワフード	岩崎 由香子 (地域協働部長 本校教諭)
②佐用で暮らす人を守る (健康寿命の延伸)	校内、佐用町、美作スポーツ医療看護専門学校	岩崎 由香子 (地域協働部長 本校教諭)
③佐用の水害から学ぶ (安全・安心な町づくり)	校内、佐用町、日本調理製菓専門学校	岩崎 由香子 (地域協働部長 本校教諭)

運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
新谷 浩一	兵庫県教育委員会 高校教育課長	学校教育に専門的知識を有する者
江見 秀樹	佐用町役場 企画防災課長	関係行政機関の職員
浅野 博之	佐用町教育委員会 教育長	学校教育に専門的知識を有する者
岸田 恵津	兵庫教育大学 教授	専門的知識(生活科学等)
田和 久典	IDEC株式会社 グリーンソリューション事業部長	学校教育外部有識者(産業)

※備考欄には、学校教育に専門的知識を有する者、学識経験者、関係行政機関の職員等、運営に関して指導・助言にあたる専門の区分を記入すること

高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
兵庫県教育委員会	高校教育課副課長 清水 道子
兵庫県立佐用高等学校	校長 西坂 美樹
佐用町	町長 庵途 典章
佐用町教育委員会	教育課 教育推進室長 西川 典男
IDEC 株式会社	社長 船木 俊之
ナニワフード株式会社	社長 松田 良彦
島根大学	教授 作野 広和
兵庫教育大学	教授 永田 智子
日本調理専門学校	校長 水野 博
美作市スポーツ医療専門学校	校長 黒瀬 通弘
兵庫県立山崎高等学校	校長 武田 由哉
佐用町自治会連合会	会長 藤本 正文
一般社団法人ドローン減災士協会	代表理事 久保 正彦

カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	作野 広和	島根大学 教授	非常勤
カリキュラム開発専門家	永田 智子	兵庫教育大学 教授	非常勤
海外交流アドバイザー	なし	なし	なし
地域協働学習実施支援員	服部 憲靖	佐用町企画防災課	非常勤

(2) 令和2年度新規指定時の研究開発概要

指定期間	ふりがな	ひょうごけんりつきやうこうとうがっこう						
令和2～最大3年間	①学校名	兵庫県立佐用高等学校				②所在都道府県	兵庫県	
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模		
	1年	2年	3年	4年	計	創立112年目の伝統校である。各学年とも普通科3クラス、農業科学科1クラス、家政科1クラス。		
家政科	40	35	33		108			
⑥研究開発構想名	「食」を通じてローコスト・ハイククオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成～佐用風土 (Sayo Food) を活用したモデルプランの構築～							
⑦研究開発の概要	<p>本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安全・安心な町づくりの三本柱で展開している。これまでも特産品を使用した商品開発には取り組んできたが、事業を通じて伝統料理、保存食へと発展させる目的がある。販売が主目的ではなく、「食」を通じて「佐用風土 (Sayo Food) 」と地域人材を活用し、健康の見直しや災害時対応などで町を活気づける。その中で、伝統料理や保存食を「高校生訪問サービス」等の実習で高齢者に提供するなど地域と協働するために、履修科目の新規充実を図り、学校設定科目の活用でカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びと地域課題の解決につなげる。</p>							
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	(1) 目的・目標						
		<p><b>【目的】</b> 佐用町は、老年人口率40%（全国平均の1.5倍）という現状に加え、平成21年台風9号の豪雨被災の教訓を生かし、地域の活性化と安全・安心で充実した暮らしができる町に進化させることが課題である。本校もこの課題を認識し、町と協働で活性化・貢献活動に取り組んできた。この事業では地域特産品や伝統料理、健康食といった「食」を中心に町と連携している「佐用風土 (Sayo Food) 」に関する取組を発展充実させ、「ローコスト・ハイククオリティ社会」の実現に貢献するとともに、「高校生訪問サービス」等の実習や探究活動を通して地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランを構築する。</p> <p><b>【目標】</b></p> <p>①地元の特産品を使った商品開発を通して地域活性化に参画できる人材の育成。 現在、産官学協働で地元特産品を使った商品開発に取り組んでいるが、さらに上級学校との連携で、地域資源を活用した地域活性化に主体的に取り組む生徒を育成する。</p> <p>②健康寿命を延ばすための地域福祉活動に参画できる人材の育成。 高齢者向けレシピの考案、体力作り啓発活動、食生活・食育指導等健康寿命を延ばすための取組を通して、地域福祉に貢献できる生徒を育成する。</p> <p>③安全・安心で災害に強いまちづくりに参画できる人材の育成。 地域と上級学校と連携して災害・被災時の課題を理解し、保存食・非常食の開発を行うなど、「食」を中心に取り組むことで、災害に強いまちづくりに貢献できる生徒を育成する。</p>						
		(2) 現状の分析と研究開発の仮説						
		<p><b>【現状の分析】</b> 本校は、佐用郡内唯一の高等学校であり、「まちを支える人づくり」をスローガンに地域連携・貢献活動に取り組んできた。家政科は、以前から「佐用風土 (Sayo Food) 」を使った焼菓子やジャム等の開発を行っており、これらの商品は地域のイベント等で生徒たちが販売を行い、地域の活性化に役立ってきた。また、地域食育ボランティアとの連携で伝統食を学び、保育所や幼稚園、小学校での食育活動を行っている。昨年からは佐用町社会福祉協</p>						

	<p>議会と協働し、独居高齢者の給食サービスにも取り組んでいる。</p> <p><b>【研究開発の仮説】</b></p> <p>コンソーシアムと連携して特産品を活用した商品開発・食改善レシピ・防災食開発等を行う中で「食」への学びを深めるとともに、課題発見・解決力、プレゼンテーション能力等を身に付け、地域課題である健康寿命延伸、災害に強い町づくりへの改善策の提言を行い、その推進に取り組む。また、地域住民の生活状況等を分析・考察し、「高校生訪問サービス」等の取組を通してボランティア精神・コミュニケーション能力等を身に付け、地域課題である高齢者が充実した暮らしのできる町づくりに向けた提言・実践を行い、積極的に地域福祉に参画し活力ある町づくりに取り組む。これらのことを通じて地域活性化を実現できるとともに「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成ができる。</p>
<p>⑧-2 具体的内容</p>	<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p><b>【1学年】</b></p> <p>佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に特産品・健康寿命・防災に関しての知識・技術における基礎的能力の習得を図る。</p> <p>「総合的な探究の時間」「生活産業基礎」「フードデザイン」</p> <p><b>【2学年】</b></p> <p>調査研究を深め、商品・レシピ開発や「高校生訪問サービス」等の協働事業を行う。少子高齢化等の地域課題解決に向けた探究・実践活動を行う。</p> <p>「生活と福祉」「生活産業基礎」「課題研究」「フードデザイン」「ヒューマンサービス」</p> <p><b>【3学年】</b></p> <p>新たな学びの中で調査研究を総括し、地域が求める人材としての進路実現を行う。研究成果を踏まえ、地域課題解決のための提案と実践を行う。</p> <p>「保育基礎」「伝統文化」「課題研究」「フードデザイン」「ヒューマンサービス」「フードスペシャリスト」</p> <p><b>【学校家庭クラブ活動】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふれあいの里上月」にて地元食材を用いた焼菓子定期販売を通じた地域活性化。</li> <li>・佐用郡内各町主催イベントにおける地元食材を用いた焼菓子販売活動を通じた地域交流。</li> <li>・県内各種イベントでの販売・体験活動を通じた佐用町PR活動。</li> </ul> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>本事業を運営するため、校内組織に「地域協働部」を、校内委員会に「地域協働事業推進委員会」をそれぞれ新たに設置した。「地域協働事業推進委員会」は、本校教職員にカリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員を加えた構成で、コンソーシアム内の「佐用風土(Sayo Food)」、健康福祉、防災教育推進の三つの小委員会、校内組織のビジョン委員会、教育課程委員会、キャリア教育推進委員会と連携・協働して、「インターシップ」や「ヒューマンサービス」等の教育内容、「高校生訪問サービス」「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動の充実に向けた協議・検討を行い、地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルの構築推進に取り組む。</p> <p>また、生徒の探究活動に対しては、全ての教職員が積極的に関わっていく。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等</p> <p>なし</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>指定終了後も、本事業の取組を持続可能なものにするために、県独自事業「ひょうごスーパーハイスクール」の指定を受ける等、一定の事業経費を計上して、支援することができる。また、「ひょうごふるさと貢献・活性化事業」やクラウドファンディングによる経費の捻出、佐用町からの貸切バス提供等も活用し、発展的に実施することができる。</p>

### (3) 研究開発の実施体制

管理機関名：兵庫県教育委員会

#### 1. コンソーシアムの構成

機関名	機関の代表者氏名
兵庫県教育委員会	高校教育課副課長 清水 道子
兵庫県立佐用高等学校	校長 西坂 美樹
佐用町	町長 庵途 典章
佐用町教育委員会	教育課 教育推進室長 西川 典男
IDEC 株式会社	社長 船木 俊之
ナニワフード株式会社	社長 松田 良彦
島根大学	教授 作野 広和
兵庫教育大学	教授 永田 智子
日本調理専門学校	校長 水野 博
美作市スポーツ医療看護専門学校	校長 黒瀬 通弘
兵庫県立山崎高等学校	校長 武田 由哉
佐用町自治会連合会	会長 藤本 正文

#### 2. カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員の体制

区分	氏名	所属	備考
カリキュラム開発等専門家	作野 広和	島根大学 教授	②
カリキュラム開発等専門家	永田 智子	兵庫教育大学 教授	②
地域協働学習実施支援員	服部 憲靖	佐用町役場 職員	②

※「備考」欄には、本事業における活用の形態別に①～③のいずれかの番号を記入すること。

- ①常勤：本事業のために管理機関又は指定校に配置され、管理機関又は指定校で常時勤務する者  
 ②非常勤：本事業のために管理機関又は指定校に配置され、管理機関又は指定校では常時勤務するものでない者  
 ③ボランティア：本事業のために活用されるが、管理機関又は指定校から賃金・謝金等の支払がされない者（①又は②に該当する者を除く。）

#### 3. 運営指導委員会の体制

所属	役職	氏名
兵庫県教育委員会	高校教育課長	藤原 俊平
佐用町役場	企画防災課長	江見 秀樹
佐用町教育委員会	教育長	浅野 博之
兵庫教育大学	教授	岸田 恵津
IDEC 株式会社	グリーンソリューション事業部長	田和 久典

#### 4. 経費

区分	金額（千円）	備考
委託費	3599千円	
管理機関よる負担	0円	
その他	0円	

#### 5. 本研究開発実施のための自財源確保の工夫（※該当する場合は、回答欄に○印を記入すること）

区分	回答
本研究開発実施のために、企業版ふるさと納税制度を活用している	
本研究開発実施のために、ふるさと納材制度を活用している	○

(4) 目標設定シート

ふりがな	ひょうごけんりつさようこうとうがっこう	指定期間	令和2～4
学校名	兵庫県立佐用高等学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート (計画時)

1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)								
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)		
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)								
地域をよくするために、地域課題の解決に関わりたいと思う生徒の割合								
a	本事業対象生徒：		90	70	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：		20	20	69	40	50	50(R4)
目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。								
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)								
健康寿命を延ばす食生活の在り方を考え、提言した生徒の割合								
a	本事業対象生徒：		30	65	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：		0	0	0	0	0	
目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。								
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)								
佐用町の防災行事等に参加した生徒の割合								
a	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：		30	30	30	40	50	50(R4)
目標設定の考え方：佐用町の現状を学び、課題を明確にする方向性を見出す。								
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)								
家庭科技術検定 (食物調理1級) 取得生徒の割合								
a	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：		5	5	0	10	10	10(R4)
目標設定の考え方：知識と技術の定着度合いをはかる。								
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)								
高校卒業後、いずれは地元で働きたいと希望する生徒の割合								
b	本事業対象生徒：		43	60	70	70(R4)		
	本事業対象生徒以外：		50	50	38	60	70	70(R4)
目標設定の考え方：地元へ愛着を持ち、就業することを目標としている。								
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)								
高校卒業後、地元へ貢献したいと思う生徒の割合								
b	本事業対象生徒：		62	65	80	80(R4)		
	本事業対象生徒以外：		50	50	61	60	70	70(R4)
目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。								
(その他本構想における取組の達成目標)								
地域交流や「高校生訪問サービス」等の体験的な学びに参加した生徒の割合								
c	本事業対象生徒：		100	100	100	100(R4)		
	本事業対象生徒以外：		50	50	50	60	70	70(R4)
目標設定の考え方：学んだことを将来に生かしたいと思う指標をはかる。								
(その他本構想における取組の達成目標)								
地域の方々と交流を持ち、協働することへの生徒の満足度								
c	本事業対象生徒：		88	80	90	90(R4)		
	本事業対象生徒以外：		50	50	73	60	70	70(R4)
目標設定の考え方：主体的な学びにつながっているかをはかる。								



2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						
a	外部講師による講義や研究会の実施回数					単位：回
	3	3	13	15	20	20(R4)
目標設定の考え方：研究開発の専門性を高めるために外部講師に委託する。						
(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						
a	商品開発に際し、関係機関と生徒の会議の回数					単位：回
	0	5	10	8	10	10(R4)
目標設定の考え方：生徒が直接地域と方々と交流を持ち、課題に取り組む。						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						
b	研究開発成果の発表会の回数					単位：回
	1	1	1	2	3	3(R4)
目標設定の考え方：地域に開かれた学校づくりを目指す。						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						
b	校外に向けてイベントなどで学びを発表する回数					単位：回
	3	3	3	8	10	10(R4)
目標設定の考え方：研究開発の成果を広く校外に発信をする。						
(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、高等学校において設定した活動指標)						
b	「食」、「福祉」等に関する各種コンテストに参加した生徒の割合					単位：%
	100	100	100	100	100	100(R4)
目標設定の考え方：生徒の学びの到達度をはかる。						
(その他本構想における取組の具体的指標)						
c	地域のことが好きな生徒の割合					単位：%
	50	65	67	85	95	90(R4)
目標設定の考え方：地域に対する生徒の愛着度をはかる。						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)						
a	コンソーシアムの委員会の開催回数					単位：回
	0	0	2	4	4	4(R4)
目標設定の考え方：研究開発の進捗状況をはかる。						
(その他本構想における取組の具体的指標)						
b	協働に際し、地域と企業で人材が参画した人数					単位：人
	10	10	13	20	30	30(R4)
目標設定の考え方：連携機関の充実度をはかる。						
(その他本構想における取組の具体的指標)						
b	校内外の探究活動などの教育活動に協力した地域の方々の延べ人数					単位：人
	50	70	10	90	110	100以上(R4)
目標設定の考え方：地域連携の充実度をはかる。						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数（人）	625	587	558	575	600
本事業対象生徒数			108	115	120
本事業対象外生徒数			450	460	480

(5) 学校設定科目に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	兵庫県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	兵庫県立佐用高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	家庭・ヒューマンサービス、ヒューマンサービスⅡ
単位数	4単位（2学年 2単位、3学年 2単位）
対象学科・学年	家政科・2学年、3学年
必履修・選択の別	必履修
設定する教科・科目の内容	<p>地域との協働事業を実施するにあたり、①地元の特産品を使った商品開発で地域活性化、②健康寿命を延ばすための地域福祉活動、③安全・安心で災害に強い町づくりの三本柱を軸に研究開発をするためには、佐用町の現状や地域住民の実態調査を行うことが必要である。</p> <p>具体的な内容としては、1学年の「総合的な探究の時間」で佐用町の現状や課題に触れ、「生活産業基礎」で地域の求める人材を基にした生活産業分野の職業について学ぶ。</p> <p>2学年では、本科目において佐用町内の高齢者宅を中心に「高校生訪問サービス」を開始し、生活状態を調査・分析し改善に向けての研究を行う。また、県外の商品開発や健康寿命延伸、防災に取り組む自治体を訪問し、実態調査と研修を行う。調査統計に関しては佐用町の企画防災課や健康福祉課などの関連機関や、商品開発協働企業と連携し、意見交換や実習を行う機会を多く持つことで専門家に助言を求める場を設け、生徒の学びを深化させる。また、県境という立地を生かし隣県である岡山県や鳥取県も積極的な交流の場とし、情報の共有と発信を行う。</p> <p>3学年では、特産物の開発商品や郷土料理の販売実習を行い、「高校生訪問サービス」では高齢者宅で実際の生活改善指導を行う。さらに、調査研究・開発内容を発表する場を設けるなどして、広く発信する機会を設ける。</p> <p>新学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」を実現するために、研究・開発した内容を地域に還元することにより、生徒の学びを周知する機会とする。2・3学年では「課題研究」「フードデザイン」とカリキュラムの横断的なつながりをもたせる。</p>
その他 特記事項	<p>地域とより関わることを目的として設定する科目であり、実技を中心に展開することから、評価方法としては「何ができるようになったか」ということを明確にするために、ルーブリック評価を用いる。また、教員のみならず協働先の評価を取り入れる。</p>

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	兵庫県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	兵庫県立佐用高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	家庭・フードスペシャリスト
単位数	2単位
対象学科・学年	家政科・3学年
必履修・選択の別	必履修
設定する教科・科目の内容	<p>本研究の主題では、「食」を通じて佐用風土（Sayo Food）を活用した地域の活性化が目的の一つであり、地域の課題解決につなげる内容である。構想で、①地元の特産品を使った商品開発を通じた地域活性化、②健康寿命を延ばすための地域福祉活動、③安全・安心で災害に強い町づくりの三本柱を挙げており、1・2学年の「フードデザイン」で地域食材を用いた献立作成や調理実習を行うことにより、基礎的な知識と技術を習得し、発展的な学習につなげる。3学年でも「フードデザイン」は履修予定であるが、既存教科としての中では限りがあることから、差異化して設定した。</p> <p>具体的に本科目では特産品開発商品の利用方法や調理法、健康食や保存食の開発やレシピ本発行、高校生カフェや郷土料理・保存食・高齢者向け料理教室の開催など、より地域に根差し、地域との関わりを深化させる内容である。また、1学年の「総合的な探究の時間」での県外での実地調査や2学年の「生活産業基礎」でのインターンシップ体験活動や調査統計結果を生かし、佐用町と照らし合わせたデータに基づく高齢者の食生活改善の指針を佐用町に特化した内容でオリジナル化を図る。三年間で生徒が学んだ高い技術と知識を広く共有するために、各種コンテストに積極的に応募したり、研究発表の場を設けたりすることで情報を発信する。</p> <p>さらに、健康寿命を食生活の面で支える内容を研究することで、「高校生訪問サービス」の一環として、同じ学校設定科目である「ヒューマンサービス」でのフィールドワークに活用する。将来的に介護や保育などの生活産業にまつわる職業でフードスペシャリストとして食分野で活躍する人材の育成をする。</p>
その他 特記事項	<p>地域と食をよりつなげることを目的として設定する科目であり、評価方法としてはポートフォリオなども積極的に活用する。校内のみならず外部からの評価も取り入れる。</p>

# 『「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェSSIONAL人材の育成』 ～佐用風土(Sayo Food)を活用したモデルプランの構築～

## 「食」に通じた、佐用を支えるプロフェSSIONAL人材の育成

- 「佐用風土(Sayo Food)」で食改善！
- 「高校生訪問サービス」で高齢者に笑顔！
- 「保存食・非常食」で災害に強い安全安心な町づくり！

絆できらめく ひと・まち・自然  
未来へつなぐ 共生の郷  
～わたしたちの手で作るわたしたちのまち佐用～



学年	付けたい力	佐用の特産品を活用 (商品開発・食育活動・ 開発商品の広報・販売活動)	佐用で暮らす人を守る (高齢者食生活調査・ 食改善レシピ開発)	佐用の水害から学ぶ (災害時保存食開発・ 避難時支援者育成)	開発目標
3年	探究 発展力	フードスペシャリスト (高校生カフェ・ レシピ本発行)	ヒューマンサービス (高校生訪問サービス)	ヒューマンサービス (減災対策の提言)	●最終成果発表 (商品、レシピ本等) ●検証と成果普及方 法の確立
2年	探究 実践力	課題研究 (「佐用風土(Sayo Food)」を使った商品開 発・食育活動)	ヒューマンサービス (地域課題改善策の 提言)	フードデザイン (保存食・非常食開発)	●校外外での中間発 表等の実施 ●フィールドワーク
1年	探究 基礎力	フードデザイン (基礎学習・食育活動)	生活産業基礎 (地域実態調査)	総合的な探究の時間 (防災学習・佐用学)	●カリキュラムや評 価等の研究・開発 ●PDCAサイクルの 確立

「食」を通じた課題解決

### 佐用町課題解決3方針

- 佐用の特産品を活用 (商品開発・マーケティング)
- 佐用で暮らす人を守る (健康寿命延伸)
- 佐用の水害から学ぶ (安全安心な町づくり・災害レジリエンス)

### 佐用高校課題解決3施策

- 「佐用風土(Sayo Food)」商品開発
- 「高校生訪問サービス」実施
- 「保存食・非常食」開発

#### 佐用町の強み

- 「播磨国風土紀」が記す歴史と伝統
- 肥沃な土壌
- 兵庫・岡山・鳥取を結ぶHUB TOWN

#### 佐用町の弱み

- 老年人口率40% (全国平均の1.5倍)
- 急激な人口減少 (5年間で半減)
- 大規模河川災害

#### 改善への取組

- 地元特産品のブランド化＝「佐用風土(Sayo Food)」
- 「健康寿命の延伸」に向けた取組
- 「減災への対応力のある」まちづくりの推進

#### 佐用町が求める人材

- 健康寿命延伸の取組を通して、ローコスト・ハイクオリティ社会の構築に貢献できる人材
- 非常食、保存食の開発を行うなど、「食」を中心とした安全・安心で災害に強い町づくりを自治体等に提言し、貢献できる人材
- 伝統食、地域特産品を使った商品開発に取り組むことを通じて、主体的に地域活性化に貢献できる人材

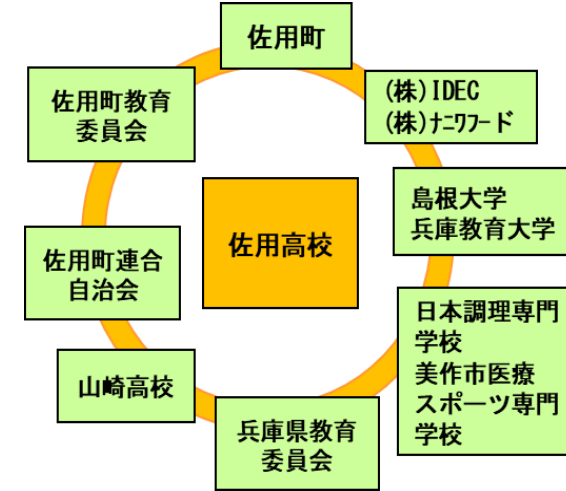
#### 佐用高校の取組

- 「佐用風土」を使った商品開発と販売→地域活性化・貢献
- 伝統食の継承と保育所や小学校での食育活動
- 子育て支援センターや介護施設での交流会、佐用町社会福祉協議会と連携した給食サービス等のボランティア活動

#### 佐用高校家政科が育成する人材

- 専門科目の知識と技術を磨き、自ら生き方をデザインできる人材
- 日本古来の伝統文化教育を中心とした教養を身につけ、豊かな心を持った人材
- 地域に根差し、社会に貢献できる人材

## 【コンソーシアム】



## 【事業対象学科の生徒数】

学 科	1年	2年	3年	計
家政科	40	36	33	108

## 【学校全体の生徒数】

学 科	1年	2年	3年	計
農業科学科	40	34	36	110
家政科	40	36	33	108
普通科	120	106	114	340

佐用高校家政科  
マスコットキャラ  
うっちゃん



## 2 研究開発の内容

本研究は「食」を中心に、①特産物による商品開発、②健康寿命の延伸、③安心・安全な町づくりの3つの研究テーマをもとに、(1) 地域との連携の推進による生徒の資質・能力を育成、(2) 生徒が主体的な学びをするための指導方法の工夫、(3) 指導に生かす評価の研究、の3つの研究開発を行い、系統立てた学びを確立し、家庭に関するプロフェッショナル人材を育成することをねらいとした。その中で地域と協働により、履修科目の新規充実をするとともに、学校設定科目の活用を図ることでカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びと地域課題の解決につなげる。

### (1) 地域との連携の推進による生徒の資質・能力を育成

#### ア 仮説

「食」における探究活動では、地域と連携した取組を行うことで、地域の問題等に対する具体的な視点を持ち、ふるさと意識の醸成と課題解決のための目的意識がしっかり認識された探究活動となる。さらに専門機関との連携により、探究内容を深め、効果を上げることができる。また、校外の活動を通して、コミュニケーション能力を育成すると共に、研究成果を広報することで情報発信力を身につけることができる。

育成できる力:

課題発見・解決力、調理技術、コミュニケーション能力、調査・分析力、ふるさと意識、ボランティア精神、企画力、情報発信力、プレゼンテーション能力

#### ①課題発見・解決力

地域の課題を発見し、生徒がグループワークなどを行うことで解決に向けた事業やツールを考えだす力を身につける。

#### ②調理技術

商品開発での試作や、地域でのカフェやレストランで提供したりすることで調理技術が向上する。

#### ③コミュニケーション能力

外部講師を招いて会議を行ったり、生徒同士で話し合いやグループワークを行ったり、地域の福祉施設訪問や小学校での出前授業を通じてコミュニケーション能力を身につける。

#### ④調査・分析力

地域住民に対して聞き取りや適切なアンケートを作成することで調査を行い、分析し解決する力を養う。

#### ⑤ふるさと意識

地域に根差した活動を行い特産品や現状を知ることで、地元に対する愛着を持つことができる。

#### ⑥ボランティア精神

地域の課題をじぶんごととして捉える中で、地域交流を行うことで貢献意識が芽生える。

#### ⑦企画力

地域課題解決に向けたイベントや行事を計画し、外部との協働で実施する力を身につける。

#### ⑧情報発信力

SNS や広報誌、地域イベントで取組を広めることで、的確な情報発信力を身につける。

#### ⑨プレゼンテーション能力

成果発表会や地域イベントで取組を発表することで、プレゼンテーション能力を身につける。

## イ 活動実績

### 【佐用の特産品を活用～特産品での商品開発～】

#### 1 テーマ設定の理由

佐用町は清流千種川の良質な水、寒暖差のある気候、豊かな土壌により夢茜トマトや佐用もち大豆など魅力的な特産品が数多く生産されており、それらを「佐用風土 (Sayo Food)」としてブランド化している。「佐用風土 (Sayo Food)」を使い地域資源を活用した商品開発に取り組むことを通して、地域活性化に貢献する。さらに、開発した商品を事業を通じて伝統料理・保存食へと発展させ、生徒の学びと地域課題の解決につなげる。

#### 2 目標


- ・地元の特産品を使った商品開発を通して地域活性化に主体的に参画できる人材の育成。
- ・現在、産官学協働で地元特産品を使った商品開発に取り組んでいるが、さらに上級学校との連携を行うことで、地域資源を活用した地域活性化により専門的に取り組む生徒を育成する。

#### 【カリキュラムの構成】

商品開発におけるカリキュラムの構成と生徒が身につける力の概要図を次ページに示した。

【食に通じた佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成】

～特産品での商品開発～

学年	付けたい力	科目・身につく力	内容
3年	<b>【探究発展力】</b> ①課題発見・解決力 ②調理技術 ③コミュニケーション能力 ⑤ふるさと意識 ⑦企画力 ⑧情報発信力 ⑨プレゼンテーション能力 	課題研究 ③ ⑦	○多世代向け食育活動（地域の福祉施設） ○「高校生カフェ」の実施（地域の古民家） →地域特産品を用いた献立開発と料理の提供
		フード スペシャリスト ① ⑤ ⑧ ⑨	○「レシピ本」の発行・配布 →特産品・開発商品の利用方法や調理法の研究 →「食改善レシピ」開発 ○「高校生レストラン」・料理教室の実施 （地域の宿泊施設） →郷土料理・保存食・開発商品を通じた地域交流 ○校外研修による専門的知識習得 （日本調理製菓専門学校）
		フード デザイン ②	○特産品を取り入れた調理実習 ○各種コンテストへの応募
2年	<b>【探究実践力】</b> ②調理技術 ③コミュニケーション能力 ⑤ふるさと意識 ⑦企画力 ⑨プレゼンテーション能力 	ヒューマン サービス ⑤ ⑨	○給食サービス →特産品や農業科学科の農作物を用いたレシピ考案 ○隣接県の実態調査
		課題研究 ⑦ ⑨	○特産品を使った商品開発（企業・役場との協働） →開発商品について発表・販売 →開発商品を用いたレシピ考案・情報発信
		フード デザイン ②	○校外研修による専門的知識習得 （日本調理製菓専門学校） ○特産品を取り入れた調理実習 ○各種コンテストへの応募
1年	<b>【探究基礎力】</b> ④調査・分析力 ⑤ふるさと意識 ⑨プレゼンテーション能力	総合的な 探究の時間 ⑤ ⑨	○佐用町を知る「佐用学」での探究活動 →役場による特別授業・調べ学習・発表
		生活産業基礎 ④	○商品開発のプロセスについて知識習得 ○地域実態調査（商品、サービス、人材調査）
		フード デザイン ⑤	○「食」に関する基礎知識および技術の習得 ○特産品を取り入れた調理実習 ○各種コンテストへの応募



### 3 実施内容

#### (1) 商品開発

##### ●目的

佐用町の特産品を使った商品開発を行うことを通して、地域の活性化に向けて主体的に取り組む態度を養い、地元の魅力を大切にしたいというふるさと意識を育む。また、企業等との協働で商品を考案していく活動を通して、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、企画力の向上につなげる。

##### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、ふるさと意識、調理技術

#### ①実施計画

対 象 課題研究（家政科 2 学年 食物コース選択者 11 名）

内 容

##### ○実施概要

課題研究（食物）を中心に「佐用町の特産品×災害備蓄食」をテーマに商品開発に取り組んだ。外部から佐用町役場の職員、地域の栄養士、夢茜トマトやもち大豆の生産者、食品会社の方々に毎月来校していただき、会議を開いた。会議での意見を参考に試作・試食を繰り返し、商品開発を行った。計画は以下の通りである。



商品開発会議

5月	商品開発に関する講習会
6月	第1回、第2回商品開発会議
7月	第3回商品開発会議
9月	第4回、第5回商品開発会議
10月	第6回商品開発会議
11月	第7回商品開発会議、開発商品完成、販売会
12月	第8回商品開発会議
2月	課題研究発表会



商品試作調理

#### ②商品開発に関する講習会

日 時 令和4年5月20日（金）5、6限

場 所 本校保育大教室

内 容

##### ○実施概要

商品開発を行うにあたり最初の授業では、協働先の方々に商品開発に関する講習会を行っていただき、商品開発を進めていく上で必要な知識の習得につながった。

【内容】 ・佐用町の水害について ・災害備蓄食について ・佐用町の特産品について  
・夢茜トマトについて ・栄養について



### ③開発商品の決定

日 時 令和4年5月～6月

場 所 本校保育大教室

内 容

#### ○実施概要

春休み課題で開発したい商品について事前にアイデアを出させ、協働先の方に10個の開発可能な商品を選抜していただいた。その中から、KJ法により生徒同士で付箋を使って自由にアイデアを出し合い、災害備蓄食に適した商品を考え、トマトスープとSOY STICKを開発することが決定した。



KJ法でのグループワーク

### ④開発商品

#### トマトスープ

夢茜トマト、佐用もち大豆を使用するとともに、その他にもキャベツ、にんじんの野菜を使用し、災害時でも野菜を摂取できることを考え商品を開発した。舌触りや見た目を良くするためにトマトの皮を湯剥きしたり、野菜もミキサーでペースト状にしたりするなど、試作・試食を重ねレシピを決定した。また、容器は瓶にすることでそのまま飲めるようにした。さらにラベルも生徒がデザインしたものを基に企業に3案を作ってもらい、赤いトマトスープが際立つように白のラベルを採用、冷めたままでも美味しい商品が完成した。



開発した  
トマトスープ

#### SOY STICK

佐用もち大豆、夢茜トマトジャムを使用するとともに、幅広い世代の方に好まれ、スティック状でいつでも食べられる点から商品開発を行った。トマトの風味を感じられるように小麦粉やジャムの量を調節したり、味や硬さを確認するため時間が経ったものを試食したりするなどして商品の改善を行い、レシピを決定した。また、容器は中身を取り出しやすく目立つようにクラフト紙のアルミパウチを採用し、ラベルは見やすさを第一に考え文字や背景の色を決定した。



開発した  
SOY STICK

### ⑤開発商品販売会「姫音祭」

日 時 令和4年11月5日(土)

場 所 姫路城大手前公園

内 容

#### ○実施概要

「姫音祭」においてプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を養うことを目的とし、開発商品の販売会を実施し、成果発表と地域交流を行った。生徒が主体的に接客や商品プレゼンに取り組めるように促し、佐用町以外の方にも佐用町の特産品や開発商品を知っていただく良い機会となった。



販売会の様子

### ○生徒の感想

- ・最初は緊張して何もできなかったが、時間が経つにつれて大きな声で宣伝できたり、来ていただいたお客様に説明したりできた。
- ・何度も心が折れそうになったが、今まで頑張ってきた分達成感があった。
- ・私たちが考えたトマトスープをその場で飲んでいただいた時に、「美味しい」と言ってくださり、今まで頑張ってきて良かったし、とても嬉しかった。

## ⑥活動報告

### (a) 商品開発会議での生徒による発表及び講評

日 時 令和4年12月16日（金）3、4限目

場 所 本校会議室

内 容

#### ○実施概要

「姫音祭」を終えた後、販売会や商品開発について振り返りを行い、会議で生徒が一人ずつ発表を行った。生徒自身の取組を振り返り、反省するだけでなく自身の成長も自覚することができた。協働先の方々からも講評をいただき、今後の取組に向けて生徒の意欲向上へとつながった。



振り返り発表の様子

#### ○協働先の方々による講評

- ・5月当初より大きく成長した。
- ・失敗を重ねながらたくさんの方に挑戦していくことが大切である。
- ・これからも高い目標や課題を持ち続けてほしい。
- ・今回学んだことを今後につなげ、継続して活動してほしい。

### (b) 課題研究発表会

日 時 令和5年2月10日（金）5、6限目

場 所 本校保育大教室

内 容

#### ○実施概要

2学年全体で課題研究発表会を行い、各分野の1年間の活動を報告した。食物コースでは、トマトスープとSOY STICKに分かれて開発から販売までの過程についてそれぞれの場面で学んだことや気づいたことを発表した。各分野の活動を共有することで互いの活動を認め合い、来年度以降の活動意欲を高め合える機会となった。

#### ○商品開発についての生徒の感想

- ・商品開発をする前は不安なことがたくさんあったが、協働先の方々にはほめていただいたり、お客様には喜んでいただける商品ができたので、とても嬉しかったし達成感があった。
- ・最初は試作も話し合いもずっと指示を待っているだけだったり、自分の意見もあまり言えなかったりしたけど、だんだん自分から動けるようになり自分の意見も言えるようになったので良かった。

- ・全て売れた時の感動と喜びはとても大きく、それをもう一度味わいたい。もう一度みんなと一緒に商品を一から開発したい。

## (2) 地産地消による高校生カフェ

### ●目的

佐用町の特産品を使ったお弁当と焼き菓子の献立を考案し提供することを通して、地域の課題解決に向けて自ら学び、主体的かつ協働的に取り組む力を養う。また、カフェ運営をすることにより企画力やコミュニケーション能力の向上につなげる。

### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

企画力、課題発見・解決力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、ふるさと意識、調理技術

### ①実施計画

対 象 課題研究（家政科 3 学年 食物コース選択者 17 名）

内 容

#### ○実施概要

9 月より佐用町の特産品を使ったお弁当と焼き菓子の献立の考案、試作・試食を始めた。地産地消の観点から佐用産の食材を使用した献立を考え、何度も試作を行った。11 月には協働先の方々に対して、試食会を実施した。いただいた意見を参考に献立を改善し、お弁当と焼き菓子を完成させ、高校生カフェで提供した。



お弁当の試作調理

### ②お弁当試食会

日 時 令和4年11月4日（金）4限目

場 所 本校第一食物室

内 容

#### ○実施概要

お弁当と焼き菓子の試食会を行い、佐用町役場や企業、平福まちづくり協議会、日本調理製菓専門学校の方々から意見をいただいた。その意見を参考にさらに献立を改善し、お弁当と焼き菓子を完成した。

#### 【献立に対する意見と改善策】

##### さばの味噌煮

- ・辛く味噌の味が薄い  
→調理時間長く炊くことができないので、献立を鱈の西京焼きに変更

##### こんにゃくのポン酢和え

- ・全部食べた時に、塩辛いと感じた  
→こんにゃくを大きめに切った



試食会の様子

### 【使用した特産品】

夢茜トマト、佐用もち大豆、もち大豆みそ、もち大豆油揚げ、三日月豆腐、鹿肉、ジャンボピーマン、三日月高原ぶどう、たつ乃屋醤油

### ③高校生カフェ in 平福「瓜生原」

日 時 令和4年11月23日（水）

場 所 お休み処 瓜生原

内 容

#### ○実施概要

##### 【カフェの実施】

地域の特産品や旬の食材を使ったオリジナル弁当の提供、焼き菓子の販売

##### 【家政科の取組に関する展示】

地域協働事業活動パネル、皆田和紙衣装の展示、ファッションショーの映像披露

開催当日は、接客、お客様の呼び込み、焼き菓子の販売に分かれて、カフェの運営を行った。接客では、生徒自身が一から献立を考えたお弁当と焼き菓子について、使用している特産品などを含めて、お弁当の魅力を説明した。また、佐用町の特産品や栄養についてまとめたチラシも作成しお弁当と一緒に配布した。佐用町の特産品をより多くの方に知っていただき、地域の活性化につなげることができた。そして、地元の飲食店を使用させていただくことにより地域の方々とのつながりの大切さを学び、ふるさと意識の向上にも結びついた。



お弁当調理



接客



オリジナル弁当と焼き菓子

#### ○生徒の感想

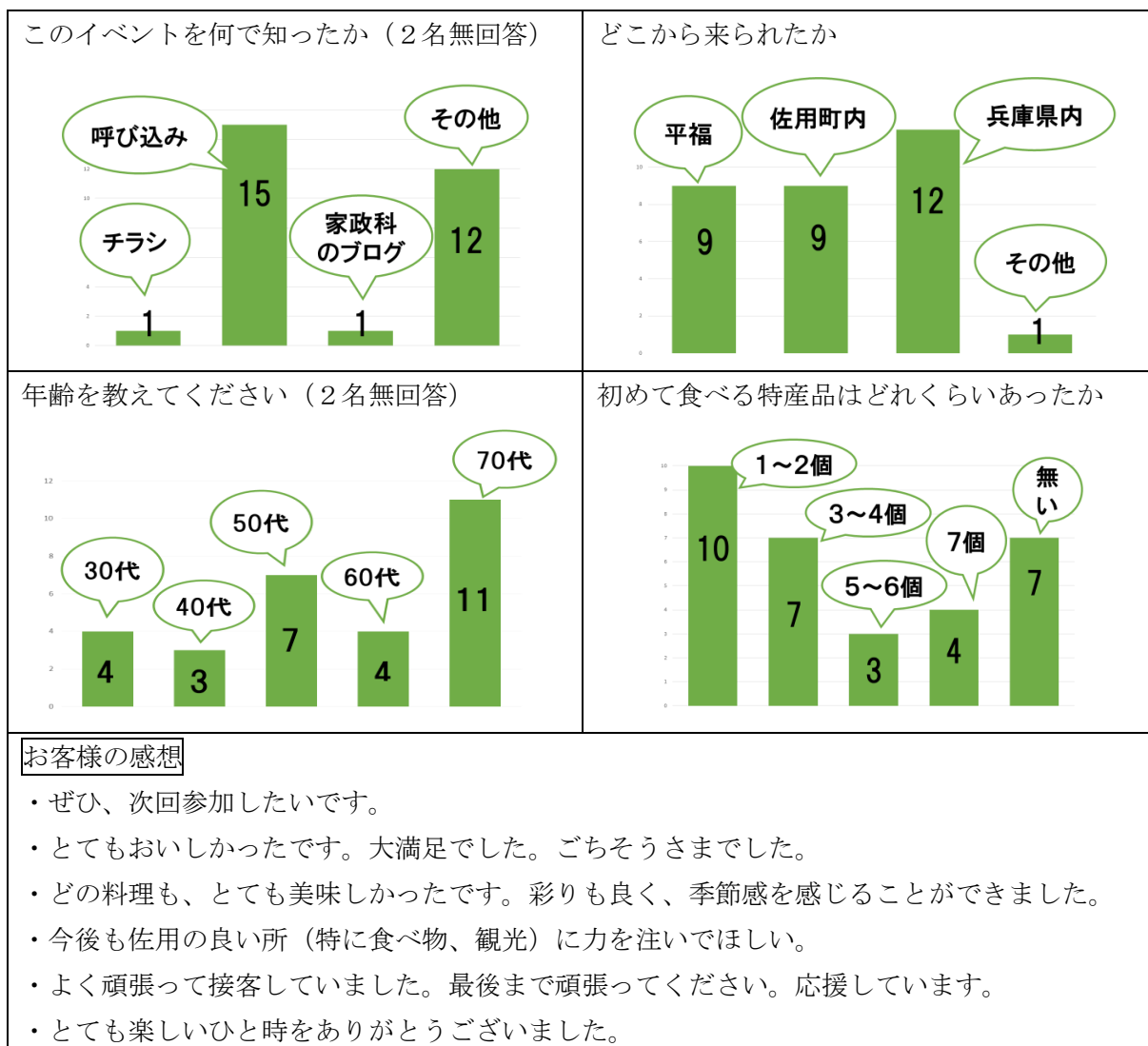
- ・雨の影響もあり、客足が途絶えることもあったが、無事にお弁当と焼き菓子売り切ることができて良かった。
- ・瓜生原でのカフェのために自分たちで一からメニューを考え、何度も試食をして味の確認などをした。これまでに体験することがなくいろいろと大変だったが、自分たちでやることで達成感を得ることができ、とてもやりがいを感じることもできた。
- ・佐用町外から来た方が、特産品にとっても興味を持ってくれ、「今日だけなの？」と次回もやってほしいという声が多くて嬉しかった。

### ④アンケート結果

対 象 お弁当を購入されたお客様

回答数 31件





### (3) 高校生レストラン

#### ●目的

生徒が開発した商品や地元特産品を使用したメニューを提供し、地域住民と関わることを通して、コミュニケーション能力を向上させるとともに、課題発見・解決力やふるさと意識を身につけ、主体的・対話的な学びにつなげる。

#### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

企画力、情報発信力、課題発見・解決力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、ふるさと意識、調理技術

#### ①校外学習

日時 令和4年9月21日（水）

場所 日本調理製菓専門学校

対象 フードスペシャリスト（家政科 3学年 35名）

内容

○実施概要

「高校生カフェ」「高校生レストラン」開催に向けて、企画運営の知識習得を目的とし、専門科から講義を受けた。接客作法の講義では実際にカフェスペースで接客体験を行い、接客をする上での注意点やポイントなどについて理解を深めた。また、テーマの決め方などカフェの企画運営に向けた講義やラテアートを体験し、カフェやレストラン開催に向けての意欲向上へとつながった。



専門学校での接客実習

## ②glaminka 講習会

日 時 令和4年9月28日(水) 2、3限目  
場 所 本校保育大教室  
対 象 フードスペシャリスト  
(家政科 3学年 35名)



施設職員による講習会

内 容

### ○実施概要

レストラン開催場所である宿泊施設「glaminka SAYO」の代表取締役を講師として招き、施設の概要やお客様とのコミュニケーション方法、スタッフとして働く心構えを教えていただいた。施設職員から実際に話を聞くことで、レストランの運営についてより現実味が増し、生徒のレストランを成功させたい気持ちを高めることができた。

## ③準備と実施

日 時 令和4年9月～12月  
対 象 フードスペシャリスト(家政科 3学年 35名)  
内 容

### ○実施概要

レストランは合計3回開催し、35名が3グループに分かれて活動した。グループに分かれて試作調理、スライド作成、プレゼンテーション練習、お品書き作成、調理材料・道具用意などの準備に取り組み、施設宿泊者に開発商品を使用したピザ作り体験、開発商品のプレゼンテーションを行った。実施内容は以下の通りである。

実施日時	第1回 令和4年10月 8日(土) 11:00～ 第2回 令和4年11月26日(土) 11:00～ 第3回 令和4年12月18日(日) 11:00～
実施場所	glaminka SAYO(兵庫県佐用郡佐用町若州 568-1 Tel:0790-71-0729)
実施内容	第1回・宿泊者に開発商品の「夢茜トマトソース」を使用したピザ作り体験 ・「夢茜トマトソース」開発に関するプレゼンテーション 第2回・宿泊者に開発商品の「夢茜トマトカレー、ソース」を使用したピザ作り体験 ・「夢茜トマトカレー」開発に関するプレゼンテーション

第3回・宿泊者に開発商品の「夢茜トマトカレー、トマトソース」使用した  
ピザ作り体験  
・「夢茜トマトカレー、ソース」開発に関するプレゼンテーション

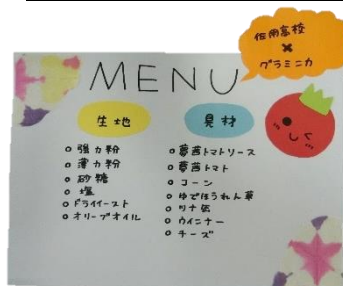
当日の流れ

時程	生徒の動き・役割	備考
8:40-	生徒集合、準備、荷物積み込み (食材切る、生地分配、プレゼンテーション練習)	第一食物室集合
9:30-	学校出発	役場から配車
10:00-	会場準備	
10:30-	チェックアウトされたお客様を案内 順次ピザ作り、試食 ①生地作り ②生地発酵 ③具材選び、トッピング ④窯で焼く ⑤試食	発酵時間にプレゼン テーション、交流
12:30-	会場後片付け、グラミンカの方にプレゼン	
13:00-	グラミンカ出発	
13:30-	片付け、解散	

参加者

実施回	宿泊者	生徒
第1回	大人14名、子ども7名	12名
第2回	大人8名、子ども5名	12名+有志3名
第3回	大人11名、子ども4名	11名+有志2名

※各回、宿泊客を4グループに分け、生徒を配置し実施



メニュー表



プレゼンテーション



窯焼き

○生徒の感想

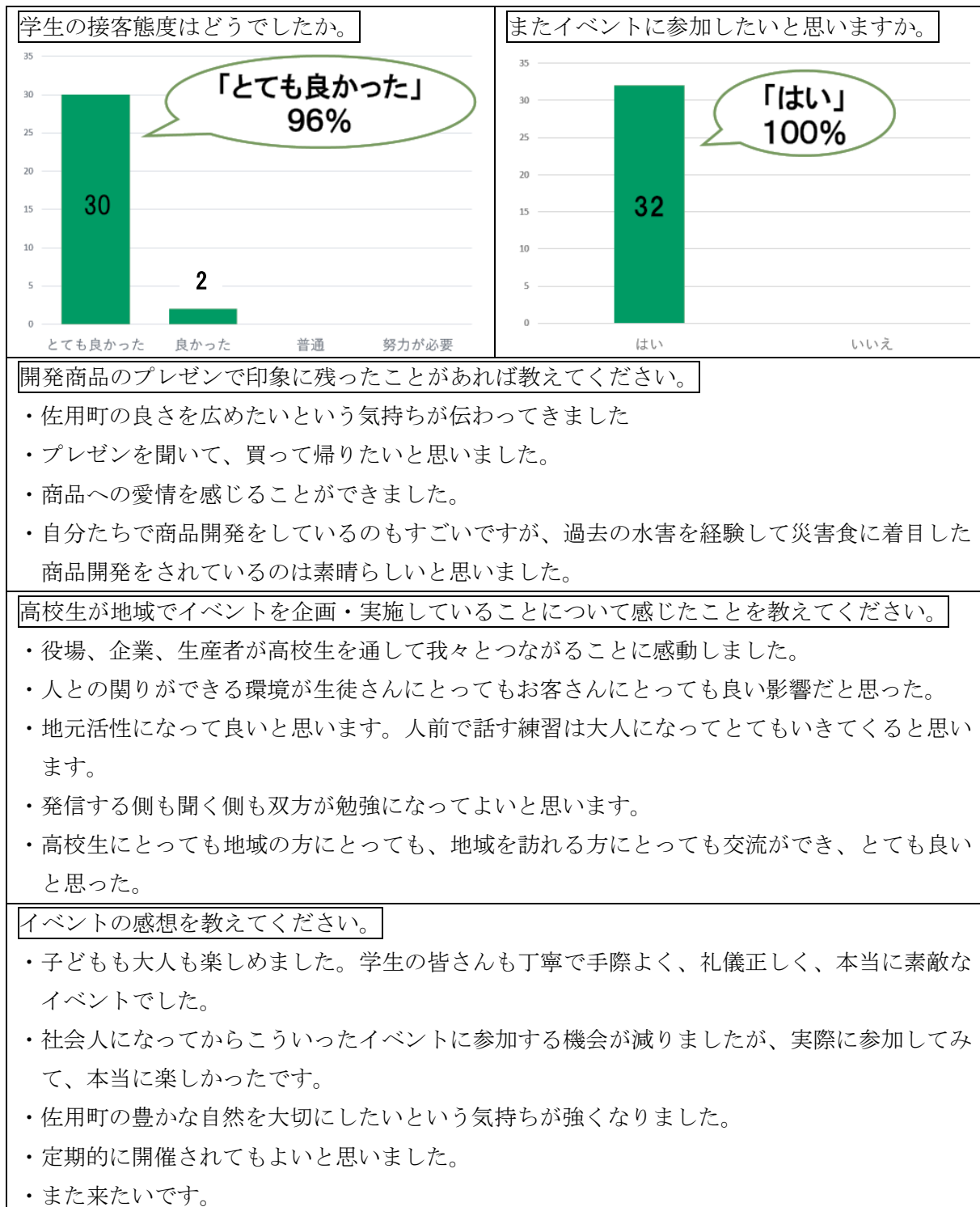
- ・子どもがピザの生地をこねている時、とても楽しそうで自分たちも嬉しくなった。
- ・お客様から話しかけてくださったり、夢茜トマトのプレゼンをさせていただいた際に、うなずきながら聞いてくださったり、たくさんの質問をしていただいて、とても嬉しく、心が温かくなった。
- ・お客様に楽しんでもらうことが一番だが、自分自身が楽しむことも同じくらい大切だと思った。私はすごく楽しかった。

- ・最初は緊張してどうなるか分からず、とても不安だったが、スタッフの方々の協力とお客様のおかげで大成功させることができ、本当に良かった。

#### ④アンケート結果

対 象 レストランに参加した宿泊者

回答数 32件





#### (4) 食育活動

##### ●目的

これまでの学習を生かした地域での食育活動を企画・実施することで、地域に学びを還元する。また、人に伝える責任を生徒に実感させ、情報発信力やプレゼンテーション能力の向上を図る。

##### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

企画力、コミュニケーション能力、情報収集力、プレゼンテーション能力、ふるさと意識、ボランティア精神

#### ①地域交流

##### (a) ふれあいクッキング

日時 令和4年月11月10日(木) 2～4限目  
場所 本校第2食物室  
対象 フードデザイン(家政科 1学年 38名)  
内容



園児とのクッキーづくり

##### ○実施概要

日々成長する園児と直接ふれあうことにより、幼児に対する理解を深めるとともに、食育活動につなげることを目的として取り組んだ。園児とのクッキーづくりやレクリエーションなど、1年生にとっては初めての地域交流となった。また、生徒が園児との交流内容を企画し実施することで企画力の向上やボランティア精神を育むことにつながった。

##### ○生徒の感想

- ・園児の子たちもすごく楽しそうに笑っていて、これからもっと楽しませてあげたいという気持ちになれた。自分たちの作ったもので楽しそうに遊んでいて私も嬉しくなった。
- ・クッキーができてプレゼントした巾着袋の中に入れて持って帰るとなった時もこっちが笑顔になるくらい楽しそうに本当の良い経験になったし良い一日にもなった。

##### (b) ふれあい育児体験

日時 第1回 令和5年1月17日(火)  
第2回 令和5年1月24日(火)  
場所 佐用町立佐用保育園  
対象 子どもの発達と保育(家政科 3学年 35名)  
内容



園児に対する食育活動

##### ○実施概要

遊びを通して子どもたちに「食の大切さを知ってもらう」ということを目的としてふれあい育児体験を実施した。食育おもちゃを事前に製作して地元保育園に訪問し、交流会を行った。コロナ禍に配慮し、訪問人数を半分に分けて2回実施した。

### ○生徒の感想

- ・食について、作ったおもちゃで遊びながら楽しく学んでもらえて良かった。
- ・子どもと関わることがないので、上手に話せるか不安だったが、子どもたちの喜んでくれている姿を見ると緊張がほぐれ、積極的に交流することができた。
- ・作ったおもちゃにとっても興味を持ち何回も遊んでくれ、「楽しかった」「ありがとう」と言ってもらえて嬉しかった。

## ②食改善レシピ本

### (a) 校外学習

日 時 令和4年6月10日（金）  
場 所 日本栄養専門学校  
対 象 フードスペシャリスト(家政科 3学年 35名)  
内 容



栄養価計算の講義

### ○実施概要

日本栄養専門学校との協働により、食改善レシピ本作成に向けた講習会を実施した。レシピ本を発行するにあって、ターゲットやテーマ設定など目的を決めて作成することが大切であることを学ぶことができた。また、介護食の特徴や実習、栄養価計算の方法などより専門的な知識・技術を学ぶことで、活動へのモチベーションが大きく向上した。

### (b) 作成と発行

日 時 令和4年5月～12月  
対 象 フードスペシャリスト（家政科 3学年 35名）  
内 容

### ○実施概要

地域住民の食生活改善や特産品を使った献立を考えてレシピ本を作成し、地域への配布やHPの掲載を行った。実施内容は以下の通りである。

実施時期	内容
5月	献立のグループ決め、レシピ本のレイアウト検討
6月	ターゲット・テーマの決定、献立検討
7月	第1回試作・評価
9月	献立再検討、カロリー・栄養価計算
10月	第2回試作・評価、献立再々検討、カロリー・栄養価計算
11月	第3回試作・評価、献立決定、カロリー・栄養価計算、レシピ本作り
12月	レシピ本作り、製本、高校生訪問サービスで配布、HP掲載

レシピ本作成にあたっては、校外学習の学びを生かしてターゲットやテーマ、本のサイズ、レイアウトなどを最初に話し合い、以下の通りに決定した。

ターゲット：佐用町に住む全世代の方

テーマ：一手間加えた料理でおいしく食卓を囲もう

本のサイズ：A4

試作は3回実施し、栄養素の摂取量を確認させながら、栄養価計算や献立の見直しを行った。また、特産品を取り入れることで地産地消の観点にも着目したレシピが完成した。レシピ本には食改善や食育を目的として栄養価や調理のポイント、豆知識を盛り込んだ。さらに、特産品の紹介ページも入れ、地域に根差したレシピ本が完成した。レシピ本は高校生訪問サービスで配布するとともに、PDFファイルにして学校HPにも掲載した。

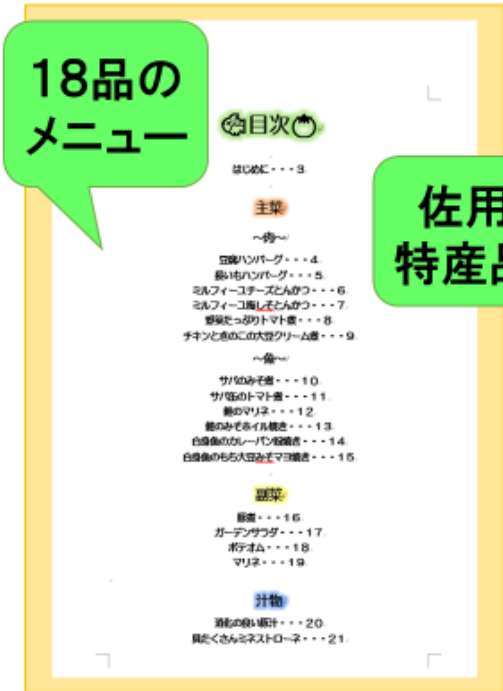
## 完成したレシピ本



栄養価計算

作り方を簡単に

豆知識



18品のメニュー



佐用町の特産品紹介

工夫を凝らしたレシピ本の中身



ブログに掲載し誰でも手に入れやすく工夫

#### ○生徒の感想

- ・レシピ本を配布することで、佐用町の方に食を通して元気になってほしいと思い活動に取り組みました。
- ・レシピ開発を行うなかで、栄養バランスを考えてどの世代の方でも食べやすい料理にすることや、テーマである、一手間加える工夫を考えるととても難しく、一からレシピ本を作る大変さを感じました。その分、町内に配布し、実際に手に取ってもらえた時に大きな達成感があり、作成して良かったと感じました。

## 4 成果

### (1) 商品開発

- ・開発商品に関する講習会や商品の試作を行うことで、知識と調理技術の向上につながった。
- ・協働先の方々との商品開発会議を通して、課題発見・解決力やコミュニケーション能力が向上し、積極的に意見を言う生徒が増加した。
- ・特産品を使用することで、地元の魅力を大切にしたいというふるさと意識が育まれた。
- ・販売会を実施することで、町外の方にも佐用町の魅力を伝えることができた。
- ・グループ活動や販売活動を通して、生徒のプレゼンテーション能力が高まった。
- ・生徒たちがアイデアを出して商品化し販売まで行うことで、商品開発の難しさを感じるとともに、大きな達成感を得ることができた。

### (2) 地産地消による高校生カフェ

- ・生徒自身が企画することにより、主体的に取り組み計画性が育まれた。
- ・給食サービスで得た大量調理に関する知識と技術を生かすことができ、カリキュラムマネジメントにつながった。

- ・地元特産品を使い、地元飲食店協力のもと販売を経験することでふるさと意識が育まれた。
- ・直接お客様や地域の方々言葉をかけていただいたことで、大きな達成感を得ることができた。
- ・グループ活動や販売時の商品のPR活動を通して、生徒のコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が高まった。
- ・お客様全員が「初めて食べた特産品がある」というアンケート結果より、佐用町のPR活動につながり、魅力の発信を実感できた。

### (3) 高校生レストラン

- ・生徒自身が企画運営をすることで、課題発見・解決力や企画力が身についた。
- ・多くの世代のお客様やスタッフの方々と交流し、コミュニケーション能力が向上した。
- ・生徒自身が開発した商品や特産品をプレゼンすることで、プレゼンテーション能力や情報発信力が身についた。
- ・アンケート結果よりお客様から「佐用町の豊かな自然を大切にしたい」などの感想をいただき、情報発信の重要性を実感し、ふるさと意識が育まれた。

### (4) 食育活動

- ・様々な食育活動を企画することを通して、課題発見・解決力が身についた。
- ・生徒が主体的に交流の企画を行ったりレシピ作成を行ったりすることで、企画力や情報収集力が向上した。
- ・子どもと接する機会が減少する中、直接ふれあうことにより、幼児に対する理解を深めると同時にボランティア精神が生まれ、コミュニケーション能力も身についた。
- ・食育活動の中で他者への伝え方を模索し実践することで、プレゼンテーション能力が向上した。

### (5) その他

- ・第53回全国高校生料理コンクール 学校賞

## 5 課題

### (1) 商品開発

- ・開発した商品を、商品化し定期的に販売することができていない。
- ・原価計算や商品の価格を決定するための知識の習得ができなかった。

### (2) 地産地消による高校生カフェ

- ・コロナ禍のため、子育て世帯との交流が難しかった。
- ・ターゲットを高齢者とし、レシピ開発を行ったが、アンケート結果を踏まえて幅広い客層に対応できていなかった。

### (3) 高校生レストラン

- ・当日にお客様の増加やキャンセルが発生し、生徒が混乱する場面が見られた。
- ・計画当初は、地域住民との交流も視野に入れていたが、実現できなかった。

### (4) 食育活動

- ・交流活動は幼児が主になっており、年齢層の幅が狭くなっている。
- ・食改善レシピ本の配布が訪問サービス先のみに留まっている。

## 6 次年度に向けて

### (1) 商品開発

- ・定期販売の実現に向けて、消費者の目線に立った商品開発を行う。そのために、アンケート調査を実施するなどの情報収集に力を入れる。
- ・過去に開発した商品の改善を行い、定期販売できる商品を目指すことも視野に入れる。

### (2) 地産地消による高校生カフェ

- ・生徒がより一層主体的にカフェの企画運営に取り組めるように支援する。
- ・活動が制限される中でも生徒が主体的に地域での活動ができるように、より地域との連携を深めていく。
- ・町外の方や留学生などターゲットの視野を広げ、レシピ開発と広報活動に取り組む。

### (3) 高校生レストラン

- ・生徒がスタッフ側であると自覚をもって接客できるように、レストラン運営のリハーサルを多く実施するなど、事前準備に力を入れる。
- ・日程調整を早めに行い、宿泊客はもちろん、多くの地域住民との交流ができるようにする。
- ・来年度以降も活動を継続しつつ、昨年同様の活動ではなく、生徒の新たなアイデアを活かして様々なPR活動を実施できるようにする。

### (4) 食育活動

- ・教員が連携しながら科目を横断した計画を立てるとともに、交流回数を増やした定期的な食育活動や、交流対象の年齢層を検討することで、地域全体での食改善の仕掛けづくりを行う。
- ・地域の高齢者の方や日本語学校の留学生などを対象に多世代向けの料理教室を開催する。
- ・食改善レシピ本を活用した地域交流イベントを実施する。
- ・レシピ開発のターゲットを増やし、より多世代向けのレシピ考案を実施する。

### (5) その他

- ・「食を通じた地域活性化」について、今後も継続して生徒が主体的に取り組めるような活動を考え、地域に還元し、地域の課題解決につながる活動に取り組んでいく。
- ・活動前の事前アンケート調査などを実施し、生徒がより明確に目標を設定し、活動に取り組んでいく。

## 【佐用で暮らす人を守る～健康寿命の延伸～】

### 1 テーマ設定の理由

佐用町は、老年人口率 40%（全国平均の 1.5 倍）であり、少子高齢化・人口減少など中山間地域における様々な課題を抱えている。高齢者が充実した暮らしのできる町づくりを目指し、「高校生訪問サービス」等の実習や探究活動を通して健康寿命延伸に向けた提言・実践を行い、その推進に取り組む。また、地域住民の生活状況等を分析・考察し、積極的に地域福祉に参画し活力ある町づくりに取り組む。

### 2 目標

- ・高齢者向けレシピの考案、体力作り啓発活動、食生活・食育指導など健康寿命を延ばすための取組を通して、地域福祉に貢献できる生徒を育成する。
- ・「高校生訪問サービス」等の取組を通して、生徒にボランティア精神・コミュニケーション能力等を身に付けさせ、地域福祉活動への積極的な参画をはかり、地域活性化を実現する。

### 【カリキュラムの構成】

健康寿命延伸におけるカリキュラムの構成と生徒が身に付ける力の概要図を次ページに示した。



【食に通じた佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成】

～健康寿命の延伸～

学年	付けたい力	科目・身に付く力	内容
3年	<b>【探究発展力】</b> ③コミュニケーション能力 ⑥ボランティア精神 ⑦企画力 ⑧情報発信力 ⑨プレゼンテーション能力	ヒューマン サービスⅡ	③ ○高校生訪問サービス →食を中心とした生活改善の仕掛けづくり ⑥ →往復はがきやリモートの活用 ⑦ ○他地域における情報収集（アンケート調査）
		フード スペシャリスト	⑧ ○高齢者食生活改善の指針を作成 ⑨ ○食改善レシピ開発・配布
		課題研究	③ ○地域の福祉施設での実習や交流
		伝統文化	③ ○伝統文化の継承 →地域の方による伝統料理・着付け・茶道・華道の講習会
2年	<b>【探究実践力】</b> ①課題発見・解決力 ④調査・分析力 ⑦企画力 ⑧情報発信力	生活産業基礎	① ○生活産業にまつわる職業体験
		生活と福祉	④ ○基礎的な知識や技術の習得 ○校外研修による専門的知識習得 （美作市スポーツ医療看護専門学校） ○外部講師による専門的知識習得（佐用町役場） ○認知症サポーターの資格取得 ○地域の福祉施設訪問実習 →体力づくり・フレイル体操・食育活動の実施
		ヒューマン サービス	④ ○給食サービス →はがきを通して双方向での交流 ○隣接県の実態調査
		課題研究	⑧ ○幅広い情報発信 →タブレット端末を操作できる人材の育成
1年	<b>【探究基礎力】</b> ⑤ふるさと意識 ⑨プレゼンテーション能力	総合的な 探究の時間	⑨ ○佐用町の地域課題に関する調査活動 →地域人口や高齢化率の検証と課題・要望の調査
		生活産業基礎	⑤ ○生活産業と職業についての知識の習得
		フード デザイン	⑤ ○「食」に関する基礎知識と技術の習得 ○食育活動 →地域の小学生や高齢者に向けた食育教室開催



### 3 実施内容

#### (1) 専門的知識・技術の習得

##### ●目的

上級学校や地域からの講義を通してより専門的な知識を習得し、生徒の深い学びにつなげる。また、「給食サービス」や「高校生訪問サービス」の実践にあたって、生徒の主体性を促す。

##### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

基礎的知識・技術、調査・分析力、課題発見・解決力

#### ①佐用町の高齢者について学ぶ

日時 令和4年6月10日（金）3、4限目

場所 本校保育大教室

対象 ヒューマンサービス（家政科 2学年 24名）

内容

##### ○実施概要

地域に寄り添った活動に取り組めるようになることを目的として、佐用町役場の高年介護課と健康福祉課から講師を招き、佐用町の高齢者の現状について講義を実施した。また、地域包括支援センターの役割やケアマネージャーや保健師などの専門職の仕事内容を聞くことで、職業に関する考えも深めることができた。講義内容は以下の通りである。

- ・佐用町の高齢者の現状や健康寿命の延伸に向けた取組
- ・給食サービスのお弁当献立を考えるポイント
- ・いきいき百歳体操体験



いきいき百歳体操体験

#### ②高齢者との接し方について学ぶ

日時 令和4年6月23日（木）5、6限目

場所 本校保育大教室

対象 ヒューマンサービスⅡ（家政科 3学年 35名）

内容

##### ○実施概要

佐用町社会福祉協議会から講師を招き、高齢者との関わり方について講義を実施した。専門的な知識を得た上で高校生訪問サービスを行えるようにすることを目的とした。高齢者との接し方を改めて学ぶことで昨年度の反省ができ、今年度の活動のモチベーションも向上させることができた。



高齢者疑似体験

#### ③校外学習Ⅰ

日時 令和4年7月7日（木）

場所 日本調理製菓専門学校

対象 フードデザイン（家政科 2学年 24名）

内容



大量調理実習

#### ○実施概要

日本調理製菓専門学校との協働による大量調理の校外学習を実施した。給食サービスに向けて大量調理の技術を習得することを目的に行った。献立ごとにグループに分かれて本格的な機械も使用して調理を行い、約40食のお弁当を製作した。また、高齢者に好まれる献立や衛生管理についても講義をしていただいた。

#### ④校外学習Ⅱ

日 時 第1回 令和4年 7月11日(月)  
第2回 令和5年 1月17日(火)  
場 所 美作市スポーツ医療看護専門学校  
対 象 生活と福祉(家政科 2学年 24名)  
内 容

#### ○実施概要

協働先である美作市スポーツ医療看護専門学校に訪問し、講習会を2回実施した。介護福祉の専門的な知識と実技について学ぶとともに、福祉分野についての知見を広げ地域の求める人材育成を目指す。実施内容は下記の通りである。

第1回：「介護福祉」についての講義と実技、車いす体験

第2回：食事介助についての講義と実技、健康体操



校内設備見学



車いす体験



介護予防体操

#### ○生徒の感想

- ・口から食べることで、栄養をとるだけでなく「おいしさ」と「楽しさ」を感じることができると知った。「口から食べる」ことが大切だと感じた。
- ・高齢者の方が座ってできるような簡単な体操をしたが、意外と疲れる体操が多かったのでびっくりした。

#### ④認知症サポーター養成講座受講

日 時 令和4年11月21日(月) 5、6限目  
場 所 本校保育大教室  
対 象 生活と福祉(家政科 2学年 24名)  
内 容

#### ○実施概要

佐用町役場の高年介護課に協力依頼し、本校の2学年を対象に認知症サポーター養成講座を開催していただいた。認知症サポーターの資格を得ることはもちろん、認知症について学んだ知識を生かしての対応をグループワークで考えることで、地域の実践活動におけるコミュニケーション能力の向上も目的とした。認知症サポーターの証としてオレンジリングを受講生全員が取得した。



グループワークの様子

## (2) 高校生訪問サービス

### ●目的

生徒が直接高齢者宅を訪問し地域住民と関わることで、コミュニケーション能力を向上させ、課題発見・解決力やふるさと意識を身につける。また、生活改善に向けての提言を行うことで、地域住民の健康寿命の延伸に貢献する。さらに、P D C Aサイクルを確立し、生徒の主体的・対話的な学びにつなげる。

### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

企画力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、ボランティア精神

### ①仮説の検証と準備

日 時 令和4年4月～12月

対 象 ヒューマンサービスⅡ（家政科 3学年 35名）

内 容

#### ○実施概要

今年度は、これまでの学習を地域に還元していくために、昨年度立てた訪問サービスの仮説を検証し、「地域がどのようなになったら活性化といえるか」をテーマに意見交換を行い、以下の訪問サービスの仮説と地域活性化の定義を考えた。

- ・高齢者の生活について学習できる
- ・コミュニケーションをとることで楽しみが増え、お互いが元気になる
- ・普段の生活の悩みなどを聞いて高齢者の方の気持ちが楽になる、笑顔が増える
- ・地域全体の活性化「以前の生活よりも楽しいと思えること」  
「違う世代同士の繋がりや、人との関わりが増えること」

そして、昨年度の反省や定義を踏まえて訪問先での交流内容を検討した。生徒の主体性を促すために各グループで計画書を作成し、訪問日に向けて準備を進めるという体制をとった。また、訪問前には訪問リハーサルによる他者評価、訪問後には自己評価を行って次回の訪問サービスに活かせるようにP D C Aサイクルを確立した。

## ②実施計画

実施時期	内容
4月	昨年度の反省
5月	仮説の検証、交流内容の検討
6月	訪問グループ分け、計画書作成
7月	訪問準備
8月	訪問先事前訪問（教員）
9月～12月	準備・リハーサル、訪問サービス実施、訪問サービス振り返り
1月	お礼状書き、送付



リハーサル



訪問準備①



訪問準備②

## ③実施

日時	第1回	令和4年	9月	8日（木）	13:30～15:20
	第2回	令和4年	10月	6日（木）	13:30～15:20
	第3回	令和4年	11月	17日（木）	13:30～15:20
	第4回	令和4年	12月	22日（木）	13:30～15:20

場所 佐用町内の高齢者世帯（学校付近12世帯、江川地区6世帯）

対象 ヒューマンサービスⅡ（家政科 3学年 35名）

内容

### ○実施概要

昨年度よりも訪問先を増やし、佐用町内の18世帯の高齢者宅に訪問を依頼した。生徒を2人1組、合計18班に分けて同じ世帯に同じ生徒が訪問する体制をとった。生徒は徒歩と車の送迎に分かれて訪問先へ行き、教員は巡回を行う。同じ世帯に訪問することで昨年度よりもさらに交流を深め、生徒に進行を任せることで主体性とコミュニケーション能力の向上を図る。昨年度との違いは以下の通りである。

	令和3年度	令和4年度
訪問人数	生徒2名（毎回違う生徒） 1世帯につき引率教員1名	生徒2名（毎回同じ） 教員を配置し、各世帯の巡回を行う
訪問世帯	10世帯（5世帯に分けて2日実施）	18世帯（1日実施）
訪問回数	3回	4回

### ○協力先

佐用町社会福祉協議会、佐用町役場



○注意点

マスク・消毒の徹底や、三密に配慮した感染対策を行う。

○スケジュール

時間	生徒の動き	備考
13:25	前庭集合	必要な荷物のみ持参
13:30～14:00	移動	江川地区：佐用町から配車 順次各世帯で降車 高校付近：徒歩で各世帯へ
14:00～14:30	高校生訪問サービス	高齢者宅により時間差
14:30～	順次帰校	江川地区：順次ピックアップ 高校付近：徒歩で帰校
15:00	学校着、振り返りとまとめ	

○実施内容

交流内容の大枠は決めておき、レクリエーションの内容やプレゼントするものなどは各班の訪問世帯の実態に沿った内容を考えた。交流内容は事前にレポートを提出させ、把握するようにした。

実施回	内容
第1回	日常生活や訪問サービスについての聞き取りアンケートを実施した。また、コミュニケーションカードによる交流を行い、訪問世帯の実態を把握することを目的とした。
第2回	アンケートを参考に各グループで訪問先の実態に合った交流内容を考え、実施した。生活改善を目的とした食や防災に関するクイズを考えて一緒にしたり、体操や脳トレ、散歩などをしたりした。また、訪問先の方の趣味や畑の紹介などをしてもらい高齢者の方の日常生活について考えを深めた。
第3回	
第4回	訪問サービスの評価や感想などの聞き取りアンケートを実施した。また、フードスペシャリストで作成した食改善レシピ本と訪問先で撮影した写真をフォトフレームにしてプレゼントした。



コミュニケーションカード



レクリエーション



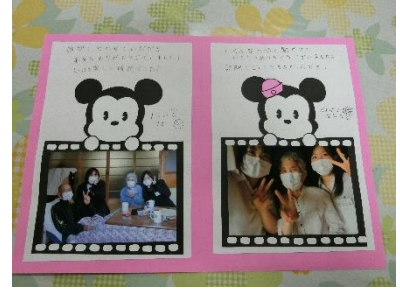
脳トレ



散歩



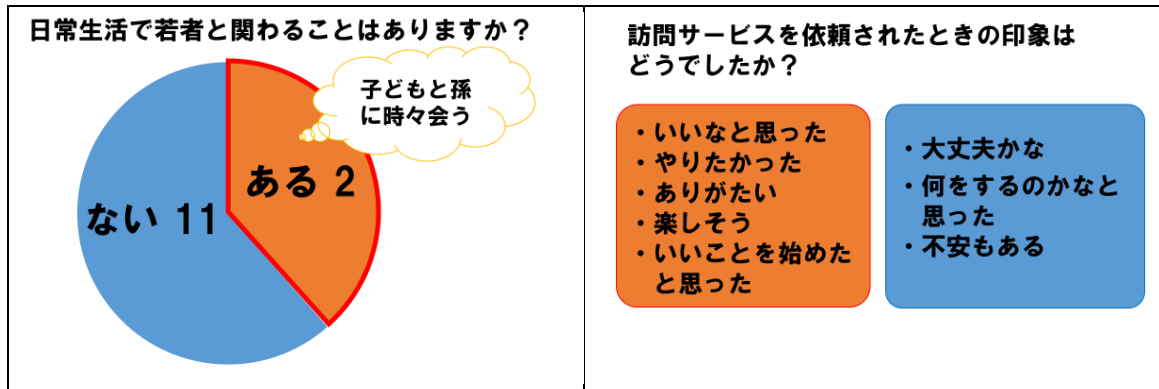
畑の案内



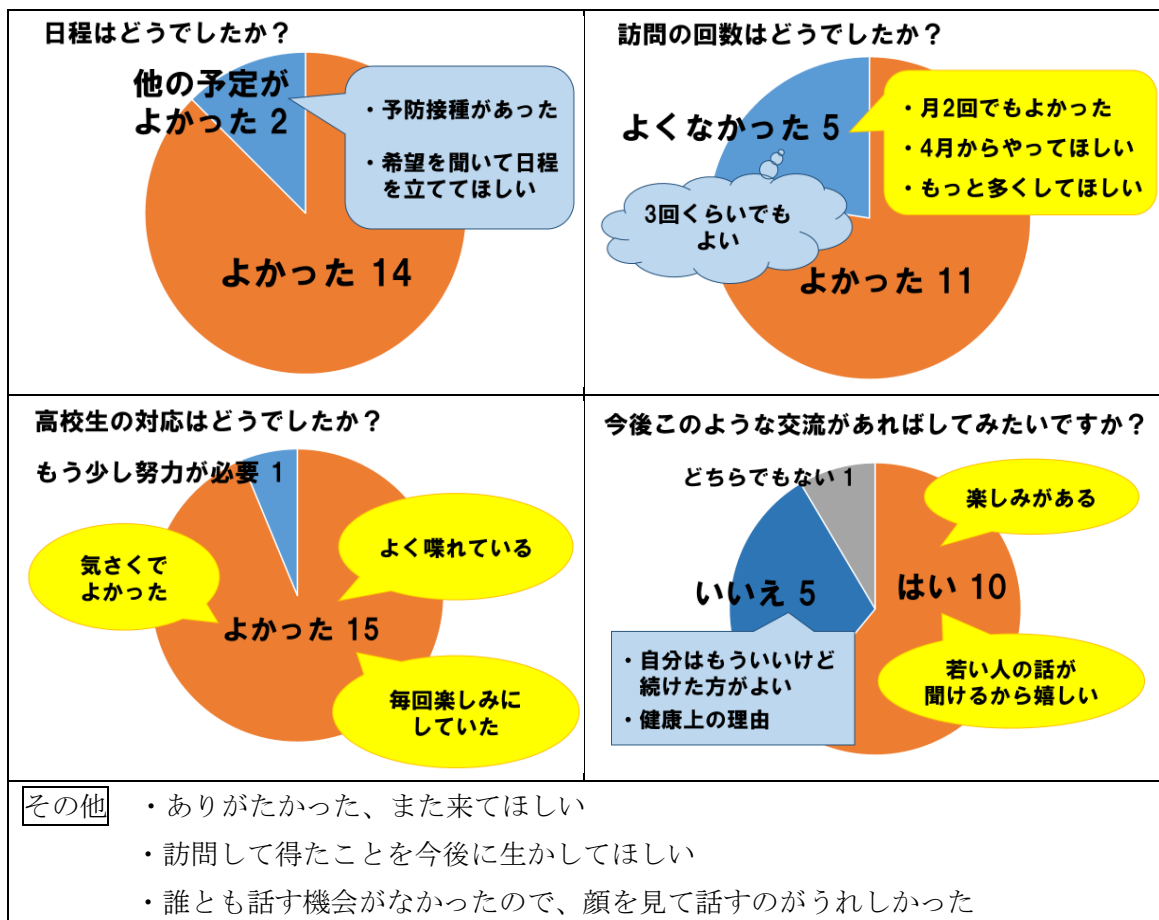
フォトフレーム

④アンケート結果と仮説の検証

○第1回聞き取りアンケート抜粋



○第4回聞き取りアンケート抜粋



### ○生徒の感想

- ・高齢者の方と話をするのは、大変だと感じました。でも、普段話すことのない方と交流できるのはすごく貴重な経験で、大変でしたがその分すごく楽しいなと思いました。同じ訪問先に行くと仲が深まり、次はどんなことをしようかなと考える力も身につきました。
- ・高校に通っているだけでは知ることができなかった高齢者の方々について知れたので、良い学びになったと思います。
- ・高校生訪問サービスをするようになって、私たちの意識が変わったかなと思います。やらされてやっているのではなく、自分たちが積極的に活動に取り組んでいるなと思いました。
- ・私はコミュニケーションをとることが少し苦手なので、実施前は不安が大きかったです。実施中にはとても楽しい時間を過ごすことができ、実施後の今では、訪問が終わってしまったことが少し寂しいです。この活動を通してコミュニケーション能力が上がり、人と過ごすことの楽しさを知ることができました。
- ・地域の方々の温かさを知ることができ、大切にしたいという思いが芽生えた。
- ・高齢者の方たちは私たちが思っているよりも元気な方が多く、様々な趣味をお持ちで、私たち自身もたくさんの元気をいただきました。交流後、「楽しい」「また来てほしい」などの声を聞くことができ、大きな達成感を得ることができました。活動して本当に良かったです。

### ○仮説の検証

アンケートを集計し、仮説の検証を行った。地域活性化においては、毎回の訪問サービスを楽しみにしてくださり、久しぶりに子供と話せて元気をもらったなどの意見から、訪問サービスの仮説を実証することができた。

## (3) 給食サービス

### ●目的

佐用町社会福祉協議会と協働で給食サービスに携わることにより、生徒が地元の方々や高齢者とコミュニケーションを図り、地域の貢献に携わる。また、上級学校で大量調理について学んだことを活かして、地域で献立作成から調理までの実践活動を行うことで調理技術の向上を目指す。

### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

課題発見・解決力、ボランティア精神、調理技術

### ①献立作成

対 象 ヒューマンサービス（家政科 2 学年 24 名）

内 容

#### ○実施概要

生徒の担当回を決め、グループに分かれて献立の作成を行った。以下の条件を提示し、タブレットなど情報機器も活用しながら献立を考案した。献立は実施日の1か月前までに管理栄養士の方にチェックしていただき、社会福祉協議会とやりとりを行いながら決定した。

<p><b>条件</b></p> <p>①右の配置図で献立を考えること（<u>生ものNG</u>）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ご飯（上に何かを振りかける程度で考える）</li> <li>・主菜（メイン料理、肉か魚を使う）</li> <li>・副菜（煮物、炒め物など）</li> <li>・副々菜（あえ物など）</li> <li>・果物（切ってそのまま入れられるもの）</li> </ul> <p>②旬の食材を取り入れる（実施日に合わせる）</p> <p>③農業科学科の食材を取り入れる</p> <p>④見た目の彩りにも注目して献立を考える</p>	<p><b>配置図</b></p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="906 248 1193 322">主菜</td> <td data-bbox="1193 248 1385 322">副々菜</td> </tr> <tr> <td data-bbox="906 322 1193 418">果物</td> <td data-bbox="1193 322 1385 418">副菜</td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="906 418 1385 654">ご飯</td> </tr> </table>	主菜	副々菜	果物	副菜	ご飯	
主菜	副々菜						
果物	副菜						
ご飯							

②お品書き作成

対 象 課題研究（情報）（家政科 2学年 情報コース選択者4名）

内 容

○実施概要

昨年度から生徒がお品書きのデザインを全て考え、コンピュータを使って作成している。また、手書きのメッセージやイラストを添えることは変えず、高齢者の方にも読みやすく文字のフォントや大きさ、季節に合ったデザインを心がけさせるようにした。



生徒が考案したおしながき

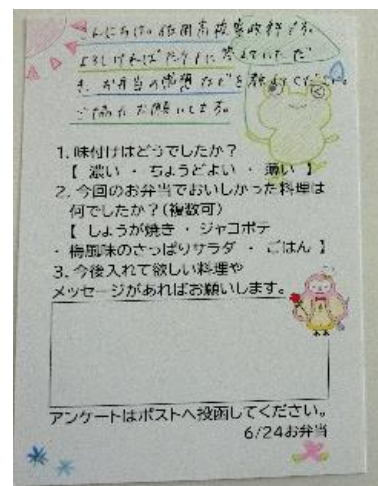
③はがき作成

対 象 ヒューマンサービス（家政科 2学年 24名）

内 容

○実施概要

人とのふれあいにつながるような双方向での実施を考え、お弁当にはがきを添えて、感想などを記入して返信していただく取組を実施した。はがきには、手書きのメッセージやイラストを添えて温かみあるものになるよう工夫した。



お弁当に添えたはがき

④調理

対 象 ヒューマンサービス（家政科 2学年 24名）

内 容

○実施概要

佐用町社会福祉協議会と協働で調理指導をしていただきながらお弁当調理を行った。完成したお弁当にお品書きをつけ、はがきを添えて各方面に配達していただいた。



実施日		献立	食数
第1回	令和4年 6月24日(金)	白ご飯、しょうが焼き、ジャコポテ、梅風味のさっぱりサラダ、オレンジ	70食
第2回	令和4年 9月16日(金)	わかめご飯、鶏肉の和風あんかけ、かぼちやの煮物、トマトとパプリカの塩昆布和え、梨	56食
第3回	令和4年10月28日(金)	梅干しご飯、鮭のホワイトムニエル、小松菜ツナサラダ、さつまいもきんぴら、柿	63食
第4回	令和4年11月25日(金)	ゆかりご飯、タラの西京焼き、彩り野菜の卵焼き、根菜煮、りんご	56食



調理の様子



第4回実施献立



完成したお弁当

### ⑤地域や生徒の反応

#### ○返信はがき

返信があったはがきは、担当生徒に感想を伝えたり、次回の献立の参考にしたりするために当該クラスで教室掲示を行った。

<p>3. 今後入れて欲しい料理やメッセージがあればお願いします。</p> <p>まず、感謝の気持ちでおいしくいただきました。佐用高校家政科のみなさん、ありがとうございます。しょうが焼き、味付けもよかったです。お役に立って高校生の作ってもらうなんて、ありがたい一言です。 弁当</p>	<p>3. 今後入れて欲しい料理やメッセージがあればお願いします。</p> <p>家では作ったことのない料理がめったりで、おいしくいただきました。これからも、いろいろな料理待っています。ありがとうございます。</p>
<p>3. 今後入れて欲しい料理やメッセージがあればお願いします。</p> <p>高校家政科には、取り組むをみて、地域に根づいてとよい事と思います。メニューでは、肉じゃがや、生姜焼きが好物です。魚も思うけど、野菜、肉、果物、金曜日も美味しく食べてみたいです。</p>	<p>3. 今後入れて欲しい料理やメッセージがあればお願いします。</p> <p>とてもおいしかった。ありがとうございます。元気で楽しい学生生活を過ごしてください。</p>

#### ○生徒の感想

- ・実施前は自分で作ったお弁当を食べてもらえることが楽しみで、一生懸命したいと思っていました。実際にしてみると大変でしたが、お弁当の盛り付けを終えて、おしながきとはがきを添えた時は大きな達成感でいっぱいでした。自分たちの力で献立から調理まで一から作り上げたお弁当を地域の方に喜んでもらえてとても嬉しかったです。自分たちで調理

した料理を食べてもらうことは、初めての体験だったので、とても楽しかったです。

- ・はがきを書くときは高齢者の方に見やすく、季節にあったイラストを描いて返事を返したくなるように工夫するのが難しかったです。しかし、後日届いたハガキに感謝の言葉が書いてあって嬉しかったです。
- ・私たちが心をこめて作ったお弁当を高齢者の方に食べてもらい、とてもやりがいを感じました。私はさらに大量調理を学びたいと思い、就きたい職業の1つとして給食調理員を考えるようになりました。また機会があったら大量調理を試みたいです。
- ・高齢者の方から送ってくださるはがきには感想がぎっしり書かれていてとても嬉しかったです。厳しい意見が書いてあるときもありますが、次に期待してくれていると感じて頑張ろうと思いました。今回の給食サービスだけでなく普段から相手の気持ちを考えて生活するようになりました。

#### 4 成果

##### (1) 専門的知識・技術の習得

- ・外部講師による講義は毎回新鮮さを感じることができ、生徒にとっても強く印象に残る学習となった。また、学んだことを活動で実践することで、学ぶ意義を感じ取ることができた。
- ・定期的に確認テストを行うことによって講習会で学んだ知識の定着を図った。
- ・様々な視点から福祉や高齢者の知識を得ることで、家族や地域の支えになっていきたいというボランティア精神も芽生えた。

##### (2) 高校生訪問サービス

- ・昨年度のアンケート結果から、今年度は回数を増やして実施した。地域の方に元気を届けるとともに、地域とのつながりが深まり、生徒の愛着心が大きく向上した。
- ・仮説や地域活性化の定義を自分たちで立て、目的を明確にして活動に取り組むことで、活動の成果や課題が明確になった。
- ・授業での活動内容を教員から指示するのではなく、各グループで計画書を作成し、訪問日に向けて自分たちで授業内の活動を決定することで、主体性を促すことができた。
- ・教員は訪問先へ巡回するシステムにすることで、生徒が責任を持って主体的に活動に取り組むことができた。また、訪問先では、予定通りにいかないことも多く、その場で対処できる臨機応変さや、コミュニケーション能力が身についた。
- ・商品開発や防災と絡めたレクリエーションをすることで、生活改善の提案に繋がり、地域へ学びを還元することができた。

##### (3) 給食サービス

- ・大量調理をするにあたって、限られた時間で効率よく作業をするために生徒同士が協力することでコミュニケーション能力や協調性が身についた。
- ・上級生の活動を継承することで、先輩のように地域に貢献したいという気持ちや主体性が芽生え、意欲的に取り組む姿勢から調理技術やコミュニケーション能力が一層向上した。
- ・はがきを通して地域の反応を知ることで、生徒の取組に対する思いや地域への愛着が深まり、

活動により一層意欲的に取り組むといった良い循環ができた。

## 5 課題

### (1) 専門的知識・技術の習得

- ・学年や教科で1年間の講義計画を作り、知識の定着と実践活動に繋げる。

### (2) 高校生訪問サービス

- ・毎年違う世帯に訪問するのではなく希望世帯へは訪問を継続し、繋がりを深める。
- ・高齢者世帯への訪問だけでなく、学校の地域活動にも参加していただく機会を設ける。

### (3) 給食サービス

- ・活動回数を増やし、可能な限り多くの生徒が複数回取り組めるよう割り振りを工夫する。

## 6 次年度に向けて

### (1) 専門的知識・技術の習得

- ・年間指導計画に沿って講師と毎年講義内容を検討し、知識の定着と実践活動に繋げる。
- ・他学年、他科目との連携を図り、活動の継承や教科横断的なカリキュラム・マネジメントを行う。

### (2) 高校生訪問サービス

- ・訪問サービスでできた繋がりを他教科や学校行事でも交流できるよう検討する。

### (3) 給食サービス

- ・活動回数を増やし、人数の関係でこれまで1人1回しか取り組めなかったが、1人2回と実践回数を重ねることで知識・技術の定着と能力の向上を図る。
- ・これまで届いたはがきの感想から献立の改善点を見つけ、リクエストされたメニューを取り入れながら栄養バランスのよい献立計画を立てる。

### (4) その他

- ・生活改善の仕掛けづくりにおける新たな取組として、佐用チャンネルやインターネットで健康体操を配信し、幅広い情報発信を行う。
- ・県境という立地を生かして、他県で特産品、少子高齢化、防災状況などの調査と交流を行い、情報の共有と発信を行うことで、課題発見力や解決力の向上を目指す。
- ・日本語学校の留学生と学びを生かしたイベントを実施して交流し、広い視野とグローバルな知識・技術の習得を図る。

## 【佐用の水害から学ぶ～災害に強い町づくり～】

### 1 テーマ設定の理由

本校が所在する佐用町は、平成21年台風9号の豪雨被災の教訓を生かし、地域を安心安全で充実した暮らしができる町に進化させることが課題として挙げられている。本校でもこの課題を取り上げて、町と協働で活性化・貢献活動に取り組んでいきたいと考えたため、「災害に強い町づくり」をテーマとした。

### 2 目標

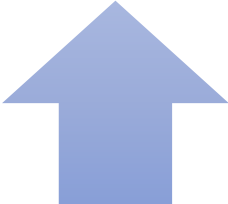
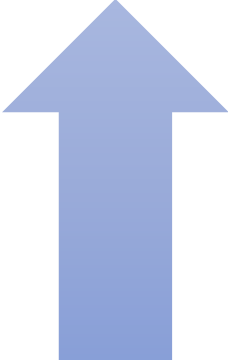
- ・地域と上級学校と連携して災害・被災時の課題を理解する。
- ・災害時に備え、栄養バランスを考慮した災害食、保存食の開発を行うなど、「食」を中心とした安全・安心で災害に強い町づくりを自治体等に提言し、貢献できる人材育成を目指す。

### 【カリキュラムの構成】

災害に強い町づくりにおけるカリキュラムの構成と生徒が身につける力の概要図を次ページに示した。

【食に通じた佐用を支えるプロフェッショナル人材の育成】

～安全安心な町づくり～

学年	付けたい力	科目・身に付く力	内容
3年	<b>【探究発展力】</b> ③コミュニケーション能力 ⑥ボランティア精神 ⑦企画力 ⑨プレゼンテーション能力 	ヒューマン サービスⅡ ⑥ ⑦	○減災対策の仕掛けづくり →「防災マニュアルブック」作成・配布 →地域の「ハザードマップ」作成・配布 →地域住民向け減災講義・体験 →減災 week 実施
		課題研究 ③ ⑨	○多世代向け防災教室実施 →地域の福祉施設・高齢者と協働 ○防災訓練指導・避難誘導 →学年間指導（下級生に伝授）
2年	<b>【探究実践力】</b> ①課題発見・解決力 ③コミュニケーション能力 ⑦企画力 ⑧情報発信力 ⑨プレゼンテーション能力 	フード デザイン ①	○保存食・非常食開発 →日本調理製菓専門学校との協働 →開発商品を使ったレシピの考案 →伝統料理講習会（いずみ会）
		ヒューマン サービス ⑨	○隣接県の実態調査 ○課題研究と横断的なカリキュラム・マネジメント
		課題研究 ③ ⑦ ⑧	○「佐用合同防災訓練～KIZUNA 大作戦～」企画・実施 →普通科・農業科学科との連携 →役場や消防署、大学との協働 →企画会議の実施 →生徒による減災体験学習 ○多世代向け防災教室実施 →地域の福祉施設・高齢者・小学校との協働
1年	<b>【探究基礎力】</b> ①課題発見・解決力 ②調理技術 ⑤ふるさと意識	総合的な 探究の時間 ① ⑤	○防災学習 →役場・消防署による特別授業 ○調べ学習とポスターセッション（佐用町の水害）
		フード デザイン ②	○「食」に関する基礎知識と技術の習得 ○防災を通じた食育活動 →パッククッキング講習会（いずみ会） →幼児向けクッキング講習会 ○各種コンテストへの応募

### 3 実施内容

#### (1) 災害・防災について学ぶ

##### ●目的

災害や防災の知識や技術を習得することで、実践活動において生徒の主体性を促す。また、上級学校や地域の方との交流を通じて、より専門的な知識を習得し生徒の深い学びにつなげる。

##### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

基礎知識・技術、ふるさと意識、課題発見・解決力、コミュニケーション能力

#### ①佐用町について知る「佐用学」

日 時 令和4年5月27日（金）3限目

場 所 本校保育大教室

対 象 総合的な探究の時間（家政科 1学年 38名）

内 容

##### ○実施概要

佐用町役場企画防災課から講師を招き、新入生が佐用町の取組や現状について基礎知識を得るために講義を実施した。平成21年に佐用町で発生した水害についても教えていただき、生徒の防災意識とふるさと意識の向上を目的とした。



「佐用学」の講義

##### ○生徒の感想

- ・佐用町についてもっと多くのことを知って完璧に佐用のことについて説明したり、まだまだ知られていない魅力を見つけたり、佐用のことをあまり知らない人に教えたりできるような学習をしたいと思った。
- ・自分なりにできることをして、困っていたらすぐに助けられるような人になって、地域の人とたくさん関わっていきたいと思った。
- ・私も佐用町や先輩方が行っている取組に少しでも役に立てるようなことをしたいと思った。

#### ②子ども向けの減災教育

日 時 第1回目 令和4年6月 7日（火）1限目

第2回目 令和4年6月23日（木）1限目

場 所 本校保育大教室

対 象 課題研究（福祉）（家政科 2学年 福祉コース選択者9名）

内 容

##### ○実施概要

小学生向けの減災教育の企画・実施に向けて外部講師を招き、専門的な知識を身に付けることで、生徒の主体的・対話的で深い学びにつなげることを目的とした。1回目はキャンディーレイを用いた減災ワークショップの進め方、2回目は防災・減災について今からできることについて講義をしていただいた。



減災ワークショップ



### ③災害について学ぶ

日 時 令和4年6月10日（金）5限目  
場 所 本校保育大教室  
対 象 課題研究（福祉）（家政科 2学年 福祉コース選択者9名）  
内 容

#### ○実施概要

ドローン減災士協会から講師を招き、佐用合同防災訓練の企画者である課題研究（福祉）の生徒を対象に、改めて佐用町の水害について考え、学びを深めるため、当時の写真や映像、復興までの道のりについて講義を実施した。



佐用町の水害についての講義

### ④校外学習

日 時 令和4年9月22日（木）  
場 所 日本調理製菓専門学校  
対 象 フードデザイン（家政科 2学年 24名）  
内 容

#### ○実施概要

日本調理製菓専門学校との協働による災害食・保存食研修会を実施した。災害時に活用できる知識と保存食の技術について学ぶだけでなく、災害に関する事業と横断的なつながりを持たせることを目的とし、缶詰や真空調理の商品開発につなげる。



災害食調理実習

### ⑤防災ワークショップ

日 時 令和4年10月14日（金）5、6限目  
場 所 本校保育大教室  
対 象 課題研究（家政科 2学年 24名）  
内 容

#### ○実施概要

企画生徒だけではなく、2年生全員の防災意識を高めるため、兵庫県立大学による防災ワークショップを実施した。災害時の食の重要性について学ぶとともに、大学生が考えた「みんなで遊んでたすカルテット」を行い、災害について楽しみながら学ぶ方法を体感した。



大学生によるワークショップ

### ⑥防災推進国民大会2022

日 時 令和4年10月22日（土）  
場 所 人と未来防災センター  
対 象 課題研究（福祉）（家政科 2学年 福祉コース選択者9名）



## 内 容

### ○実施概要

合同防災訓練の実施に向けて、幅広い知識を身につけることを目的として参加した。会場内では、様々な学校や企業のプレゼンテーションが行われており、防災について広い視野に立った知見を養った。また、昨年度実施した防災訓練と開発した災害食についてポスター展示も行った。



ポスター展示



企業プレゼンテーション



地震体験

### ⑦災害食学習

日 時 令和4年11月17日(木) 3、4限目  
場 所 本校第一食物室  
対 象 フードデザイン(家政科 1学年 38名)  
内 容

#### ○実施概要

佐用町の栄養士、いずみ会の皆様からの災害食学習であるパッククッキング講習会で防災を通じた食育活動を実施した。知識・技術の習得だけでなく、地域の方との交流も目的とした。



パッククッキング実習

### ⑧佐用町まち歩き

日 時 1回目 令和5年1月27日(金) 1限目  
2回目 令和5年2月 2日(木) 3限目  
場 所 本校保育大教室、学校周辺  
対 象 総合的な探究の時間(家政科 1学年 38名)  
内 容

#### ○実施概要

ドローン減災士協会の方をお招きし、二度にわたって佐用町の水害や防災の取組について講義をしていただいた。1回目では水害が起きた時の映像や写真をもとに講義をしていただき、2回目では佐用町の町歩きを実施した。実際に被害を受けた町の中を歩き、被災された方から当時の様子を聞くことができた。佐用町の水害について調べ学習を行っている1年生にとっては、学びを深める機会となった。



被災者による説明

### ○生徒の感想

- ・私たちがいつも登校している道で、人が亡くなられたということが印象に残った。いつ何が起こるかわからないからこそ、一日一日を大切にしていかなければいけないと思った。
- ・特別講義や町歩き後の自分は水害についてもっと知りたいと思うようになった。水害に対して気持ちがすごく強くなり、もっと佐用町のために何かしたいと思った。

## (2)減災week

### ●目的

学校全体で防災学習に取り組み、防災意識を高め、他学科・他教科との連携などカリキュラム・マネジメント体制の構築を行う。

### ○実施概要

「減災week」を防災訓練前後に設定し、その期間、各教科で防災・減災・災害などに関する内容を取り入れた授業を1時間程度行う。以下の計画を立て実施した。

実施時期	内容
9月	各教科に授業内容のアンケート調査
10月	授業の実施を教科主任に依頼
11月	減災week設定、各教科の授業で実施
12月	防災訓練実施

授業前と授業後には生徒にアンケートを実施し、生徒の変容を確認した。また、授業担当教員にもアンケートを実施し、この取組の今後の在り方を調査した。実施した教科は以下の通りである。

教科	科目	学年	内容
家庭	家庭基礎	1年	災害時の備えについて
農業	農業と環境	1年	農業と災害の関係
保健体育	保健	1年	応急手当について
美術	美術	2年	防災ピクトグラム
英語	英語表現	2年	防災対策について
社会	地理A	3年	ハザードマップ

## (3)佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～

### ●目的

佐用町との協働事業として防災訓練を拡大させて実施することで、地域とともに災害について学び地域全体の防災意識の向上を目指すことで、「災害に強い町づくり」につなげる。

また、生徒自らが計画から進行を行うことで、企画運営力を身につけ、地域住民と関わることでコミュニケーション能力を向上させ、主体的・対話的な学びにつなげる。

### ●生徒に身につけさせたい資質・能力

情報発信力、課題発見・解決力、企画力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、ふるさと意識

## ①計画と仮説

日 時 令和4年4月～7月  
場 所 本校第一被服室  
対 象 課題研究（福祉）（家政科 2学年 福祉コース選択者9名）  
内 容

### ○実施概要

課題研究（福祉）選択者が合同防災訓練の企画中心者となり、実施計画及び仮説を立てた。外部講師の講習会を参考に、グループに分かれて、地域と防災訓練をすることでどんな効果があるか、防災訓練でどんなことに取り組みたいかなどの意見交換を行った。

### ○実施計画

実施時期	内容
1 学期	外部講師による講義、防災訓練に関する調べ学習、仮説の設定
9 月	第1回企画会議（昨年度の反省と内容検討）、体験学習の立案
10 月	体験学習準備、役割分担、関係各所依頼
11 月	第2回企画会議（進捗状況報告、当日の流れについて）、体験学習準備、防災リーフレット作成、佐用小学校事前交流
12 月	リハーサル、佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～実施、アンケート集計

### ○協力先

佐用町役場、佐用小学校、近隣住民、佐用消防署、ドローン減災士協会、兵庫県立大学

### ○仮説

- ・地域と協力して防災訓練を行うことによって佐用町全体の防災意識が高まる。
- ・実際に災害が起こった時に地域の人と協力し助け合いながら対応、行動ができるようになる。

## ②企画会議

日 時 第1回目 令和4年 9月 9日（金）5、6限目  
第2回目 令和4年11月 4日（金）5、6限目  
場 所 本校保育大教室  
対 象 課題研究（福祉）（家政科 2学年 福祉コース選択者9名）  
参加者 佐用町役場（企画防災課）、ドローン減災士協会、佐用高校関係者  
内 容

### ○実施概要

防災訓練の準備を進めるにあたって、佐用町役場やドローン減災士協会にも参加していただき、企画会議を開催した。様々な視点からのアドバイスを多くいただくことで、生徒自身の防災訓練に対する視野を広げることが目的とした。また、実際に防災訓練に協力していただく方と直接関わることで、生徒の企画に対する責任感の向上も目指した。



防災訓練企画会議

#### ○生徒の感想

- ・自分の意見を言うことは苦手だけど、ちゃんと言うことができ自分の成長を実感しました。企画会議ではたくさんの意見をいただけてとても勉強になりました。

#### ③佐用小学校事前交流

日 時 令和4年11月30日(水) 10:15～11:15

場 所 佐用町立佐用小学校

対 象 課題研究(福祉)(家政科 2学年 福祉コース選択者9名)

内 容

##### ○実施概要

佐用小学校1年生(39名)の児童を対象とし、防災出前授業と備蓄食ワークショップを行った。6月に実施した子供の減災教育の学びを活かし、生徒自らが内容を企画し、計画を立てて準備に取り組んだ。また、12月に行われる合同防災訓練に向けた事前交流も目的とし、ワークショップで作ったキャンディーレイは避難時に身に付けてもらうことにした。



小学生とのワークショップ

##### ○生徒の感想

- ・防災について興味を示してくれて、積極的に取り組んでくれたのでとても嬉しく、達成感がとても大きいです。
- ・自分たちで考えて行動したり協力したりとすごく充実した時間だった。

#### ④体験学習準備

日 時 令和4年9月～防災訓練当日まで

対 象 課題研究(福祉)(家政科 2学年 福祉コース選択者9名)

内 容

##### ○実施概要

昨年度の反省を踏まえて体験学習を考案し、担当を決めて準備に取り組んだ。

##### (a)パッククッキング試作調理

パッククッキングの体験学習に向けて、複数の献立候補を挙げて試作を行った。完成品の評価をすることで当日の体験献立を決定した。(図1)カレー、チキンライス、ピザ風蒸しパンを試作し、調理の手軽さや味、満足度の観点から当日の体験献立はカレーに決定した。さらに、当日のシミュレーションをするため屋外で実際に1クラス分のパッククッキングを行い準備物の確認をした。(図2)

##### (b)講義考案

2学年の体験学習で家政科生徒が実施する災害食講義に向けて、講義の流れやスライド、原稿を考えた。(図3) これまでに学んだ知識を生かして内容を検討し、一方的に知識を話すのではなく、クイズ形式で聞いている人とやり取りすることで、楽しみながら防災を学ぶ工夫を考えた。また、講義の中で行う紙皿やスプーン作りに必要な材料準備も行った。



(c)佐用小学校、地域住民体験学習

体験時間は約30分とし、佐用小学校、地域住民の方の体験学習の考案と準備を行った。必要材料の準備や当日の説明プリント、原稿などを作成した。(図4)また、佐用町役場にご協力いただき、段ボールベッドの組み立て練習を行った。

(d)ドローン放送練習

ドローン減災士協会にご協力いただき、生徒のドローンによる避難誘導放送の練習を本校グラウンドにて行った。放送原稿は生徒が考え、読むスピードや発音などにも気を配って練習した。(図5)

(e)リハーサル

家政科1、2学年全員で、防災訓練前に各体験場所で担当に分かれてリハーサルを行った。事前に担当班長を決め、各場所で班長が同級生や後輩に指示することで強い責任感を持たせ、主体性を促した。(図6)



図1 パッククッキング試作



図2 パッククッキング試作



図3 講義考案



図4 体験学習準備



図5 放送練習



図6 講義リハーサル

⑤防災リーフレット作成

日時 令和4年9月～防災訓練当日まで

場所 本校

対象 課題研究(福祉)(家政科 2学年 福祉コース選択者9名)

ヒューマンサービスⅡ(家政科 3学年 35名)

内容

○実施概要

佐用町の避難場所や、家政科で学んだ備蓄食やパッククッキングなどの知識を多くの人に知ってもらいたいという思いを込めて作成した。避難場所は役場に確認を取り、パッククッキングレシピは試作で調理を行った4品を記載した。サイズはA4裏表である。

## <佐用郡佐用町の避難場所>

### ★佐用小学校体育館



### <その他の避難場所>

- ・江川体育館（平福駅から徒歩38分）
- ・久崎体育館（久崎駅から徒歩2分）
- ・暮山体育館（上月駅から徒歩45分）
- ・上月小学校体育館（上月駅から徒歩16分）
- ・利神体育館（平福駅から徒歩9分）
- ・中安体育館 ・ 三日月中学校体育館 ・ 三河体育館 ・ 南光小学校

### <非常持ち出し袋に入れておくべきもの>

- ・携帯トイレ ・ マスク ・ ゴム手袋 ・ 紙コップ ・ ろうそく ・ キッチンペーパー
- ・ 割りばし ・ 紙皿 ・ ラップ ・ 救急セット ・ 懐中電灯 ・ 非常食 ・ 飲料水

「食」と「防災」  
について知ろう！



佐用高校 家政科 発行

## <災害食について>

### ローリングストック法とは？

備蓄食を使った分を買い足していく管理方法

- 突発的な災害への対応ができる
- 賞味期限の管理ができる
- 食べ慣れた味で、災害時でも安心して食べられる



## <パッククッキングレシピ一覧表>

～味に飽きない洋風レシピ～

### カレー

ミックスベジタブルver



材料(1人分)  
ミックスベジタブル…30～50g ツナ缶…1缶  
水…90ml～100ml カレールー…ひとかけ

作り方  
①ポリ袋に材料を全て入れる。  
②袋の外から全体を軽くもむ。  
③袋の空気を抜いて上のほうで結ぶ。  
④鍋のお湯が沸騰したら、袋を入れる。  
やや火を弱めて沸騰を保ち、10分煮る。

ツナ缶とミックスベジタブルを使用しているので切る作業が簡単！

### トマトチキンライス



材料(2人分)  
米…110g トマトジュース…100ml  
水…100ml コンソメ…小さじ1  
塩コショウ…少々 焼鳥缶(塩味)…半分  
ミックスベジタブル…適量

作り方  
①水以外の具材を入れて袋の外からよくもみ、混ぜる。  
②水を入れ、全体をさらに混ぜる。  
③袋の空気を抜いて上の方で結ぶ。  
④鍋のお湯が沸騰したら、袋を入れる。  
やや火を弱めて沸騰を保ち、20分煮る。  
⑤火を止め10分蒸らす。

トマトジュースを使用しているので酸味が少なくトマトが苦手でも大丈夫！

### ピザ風蒸しパン



材料(1人分)  
ホットケーキミックス…30g 野菜ジュース…25ml  
ウイナー…1/2本 ビーマン…5g  
チーズ…5g

作り方  
①ビーマンをみじん切りにする。  
②ウイナーを小口切りにする。  
③ポリ袋にホットケーキミックスと材料を入れる。  
④味がしみこむように袋の外からもみ込んだら袋の空気を抜いて上のほうで結ぶ。  
⑤沸騰したら、袋を入れる。やや火を弱めて沸騰を保ち、10分煮る。  
⑥火を止め10分蒸らす。

モチモチした食感です。ビーマンをミックスベジタブルに変えても美味しい！

## パッククッキングとは…

耐熱性のポリ袋に食材を入れ、袋のまき鍋で湯煎する調理方法のことです

### <メリット>

- ・加熱に使った水が汚れないので再利用できる
- ・袋に入れたまま食べられるので、食器が汚れない
- ・袋ごとに違う料理を作ることができる
- ・工程がシンプルで調理時間が短い



### <備蓄しておくよい食品一覧>

- ・水(1人1日3リットル) ・ α米 ・ カンパン ・ 缶詰 ・ レトルト食品
- ・ インスタント食品 ・ 日持ちする野菜(にんじん、玉ねぎ、じゃがいも) など



⑥佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～実施

日 時 令和4年12月 9日（金）2～4限目

場 所 本校グラウンド、各体験学習実施場所

参加者 本校生徒（470名）、本校職員（59名）、佐用小学校1年生・職員（42名）、  
地域住民（11名）、兵庫県立大学木村教授ゼミ生（11名）、佐用消防署（15  
名）、佐用町役場（2名）

内 容

○実施概要

(a)当日の時程

時間	内容	場所
8:55～ 9:40	LHR ※2年家政科、普通科一部生徒は準備にあたる	各HR教室
9:50～ 9:55	担任から説明	各HR教室
9:55～10:00	校内放送で緊急地震速報を流し、シェイクアウト訓練を行う	グラウンド
10:00～10:10	スピーカードローンで上空から誘導し、グラウンドに出る	
10:10～10:15	講評（消防署職員）	
10:15～10:20	総括（校長）	
10:20～10:30	ドローンを用いた物資輸送のデモンストレーションの見学	
10:30～10:35	家政科生徒によるまとめと体験学習の説明	
10:45～12:05	各学年に分かれて体験学習を行う	各実施場所
12:15～12:25	アンケートなどの記入	各HR教室



避難誘導放送



避難の様子



家政科生徒による説明

(b)体験学習

実施学年・科等	実施内容	実施場所
1年農業科学科、普通科 (117名)	けむり体験、応急手当、簡易担架作り、 AED、消火体験	グラウンド 第一多目的教室
1年家政科(38名)	体験学習補助スタッフ	各実施場所
2年農業科学科、普通科 (110名)	家政科によるパック調理体験、災害食講義	前庭、各HR教室
2年家政科(24名)	体験学習スタッフ	各実施場所
3年全学科(173名)	防災ワークショップ	体育館
佐用小学校1年(39名)	避難所生活体験(段ボールベッド組み立て)	雨天練習場
近隣住民の方(11名)	防災グッズ作り、フレイル予防体操	会議室



【1 学年農業科学科・普通科】

10:35～10:45 各実施場所に移動

時間	1組 (29名)	3組 (31名)	4組 (29名)	5組 (28名)
10:45～11:05	けむり体験	応急手当	担架・AED	消火体験
11:05～11:25	応急手当	担架・AED	消火体験	けむり体験
11:25～11:45	担架・AED	消火体験	けむり体験	応急手当
11:45～12:05	消火体験	けむり体験	応急手当	担架・AED

12:05～12:15 体験終了後スリッパを拭き、教室に戻る

(準備物) 担架用の竹(10)、ブルーシート、けむり体験用パーテーション(5)、  
その他は消防署が準備



簡易担架作り



消火体験



応急手当

【2 学年農業科学科・普通科】

10:35～10:45 スリッパを拭き、教室に戻る

1組 (32名)・3組 (38名)	4組 (19名)・5組 (21名)
10:45～10:50 パック調理の説明	10:45～11:00 災害食講義
10:50～11:00 袋詰め体験	11:00～11:05 パック調理の説明
11:00～11:15 紙皿、スプーン作り	11:05～11:15 袋詰め体験
11:15～11:20 前庭に移動	11:15～11:30 紙皿、スプーン作り
11:20～11:30 パック調理の見学	11:30～11:35 前庭に移動
11:30～11:50 教室で黙食	11:35～11:45 パック調理の見学
11:50～12:05 災害食講義、まとめの挨拶	11:45～12:05 教室で黙食、まとめの挨拶

(前庭の準備物) テント(2)、長机(8)、カセットコンロ(8)、鍋(8)、タイマー(8)、消毒液(2)

(教室の準備物) タブレット(4)、原稿、紙皿説明用紙(120)、A4古紙(240)、ポリ袋(240)、  
予備スプーン(40)、材料(120)、牛乳パック(30)、見本品(4)、紙コップ(120)



袋詰め体験



牛乳パックスプーン作り



パッククッキング見学

【3学年全クラス】1組(38名)、2組(35名)、3組(36名)、4組(32名)、5組(32名)

10:35～10:45 全クラス体育館でグループごとに着席する

10:45～10:50 体験学習の流れを説明

10:50～11:10 佐用町水害の映像、役場の方のお話

11:10～12:00 みんなで遊んでたすカルテット実施

12:00～12:05 講評

(準備物) プロジェクター、イス(173)、長机(36)、  
その他は県立大学が準備



【佐用小学校】(39名) ※小学生の持ち物：キャンディーレイ、防災頭巾

9:50～ 佐用小学校玄関前集合

9:55～10:00 シェイクアウト訓練

10:00～10:35 避難訓練

10:35～10:45 雨天練習場へ移動、トイレ休憩

10:45～11:15 1、2学年家政科による段ボールベッドの説明と体験

(準備物) 説明原稿、段ボールベッド(2)、毛布、消毒液(2)、手作り防災グッズ(39)



シェイクアウト訓練



ダンボールベッド作り



ダンボールベッド体験

【地域住民の方】(11名)

9:50～ 塔陵館前集合

9:55～10:00 シェイクアウト訓練

10:00～10:35 避難訓練

10:35～10:45 会議室へ移動

10:45～11:15 1、2学年家政科による避難生活に便利なグッズ作り、体操

(準備物) 見本品、説明原稿とスライド、モニター、説明用紙(20)、長机、イス、消毒液(1)、  
新聞紙(40)、長方形段ボール(40)、メッセージカード(20)



シェイクアウト訓練



Freiluft予防体操



新聞紙スリッパ作り

○参加生徒の感想

- ・改めて自然災害の怖さを知りました。今日学んだことを家族や周りの人に教えたいと思いました。
- ・パッキングが思っていたよりも簡単で今後に活かしたいと思った。
- ・人と人との助け合いが大切だと思った。

○地域住民の感想

- ・定期的にやって欲しい。
- ・普段高校生と接することがないので参加して良かった。
- ・防災についての意識を年に一回ではあるけれど新たな呼び起こしのチャンスをもたらえて良かった。
- ・地域の方と接する機会が今後とも企画できたらと期待しています。

⑦まとめ

(a) アンケート集計と仮説の検証

日 時 令和4年12月～令和5年2月

場 所 本校パソコン教室

対 象 課題研究（福祉）（家政科 2学年 福祉コース選択者9名）

内 容

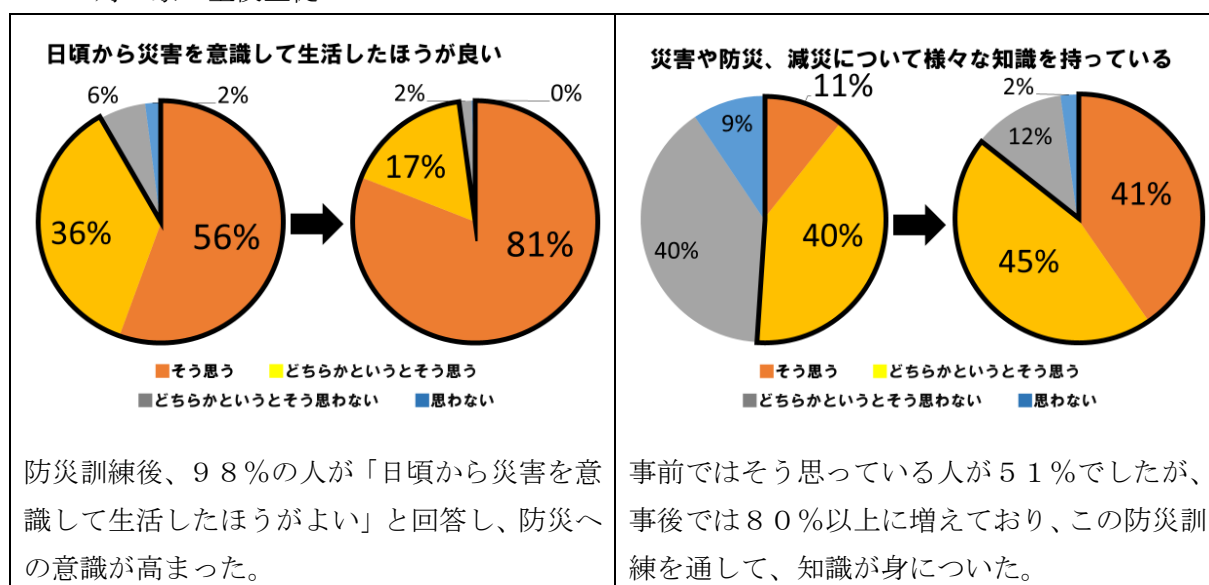
○実施概要

防災訓練実施前後に全校生徒を対象にアンケートを実施し、企画生徒が集計と考察を行った。感想やアンケート結果から仮説が実証でき、地域と一緒に防災に取り組み、活動を継続していくことの意義を実感した。

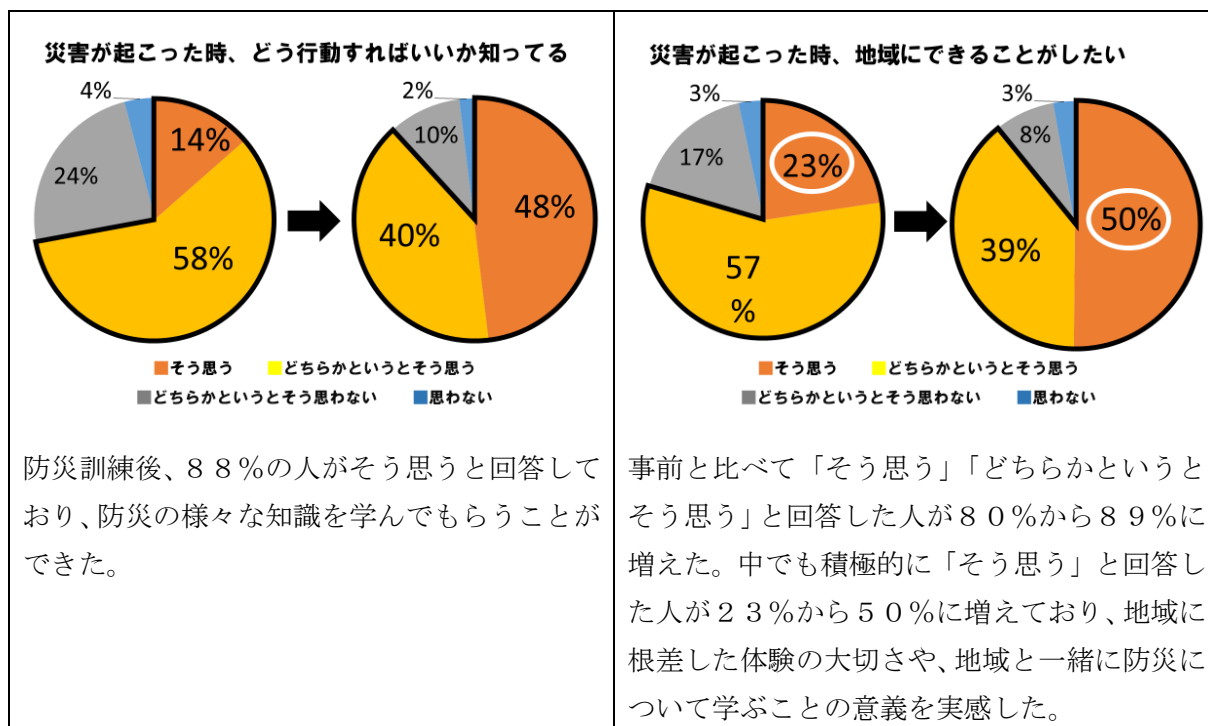
○アンケート結果

実施日：令和4年12月9日（金） 防災訓練前後

対 象：全校生徒







(b) 課題研究発表会

日 時 令和5年2月10日（金）5、6限

場 所 本校保育大教室

対 象 課題研究（家政科 2学年 24名）

参加者 家政科 第1学年 38名、協働先の皆様

内 容

○実施概要

課題研究発表会で各グループに分かれて活動内容を発表した。福祉班は合同防災訓練の1年間の活動内容をまとめ、体操などの実演も交えて発表した。活動内容はもちろん、アンケート結果や考察、次年度への課題を報告し、PDCAサイクルを確立した。

○企画生徒の感想

- ・人前で話すのが昔から苦手で、講義を担当することが決まった時は、自分にリーダーが務まるのか、時間内に終わらせることができるのか1年生を引っ張っていくことができるのか不安だらけでした。何度も自分の読むところを練習し、声もハキハキと大きく話せるように努力しました。友達も一緒に協力してくれたおかげで本番は成功することが出来ました。苦手なことに挑戦することは怖いし、すごく勇気が必要でした。ですが、自分なりに頑張った期間は高校生活の一つの貴重な時間になったと思います。やって良かったです。終わった後の安心感と達成感は今でも忘れません。
- ・今年は先輩ではなく2年生の私たちが一から全て考えて企画するというので、正直このメンバーで成功させることができるのかという気持ちもありました。ですが、福祉班に入っている以上絶対にやらなければいけないことだし、一人でも欠けたら周りに迷惑もかかるし、みんなも真剣に取り組んでいる姿を見て、私も頑張ろうと思えました。

- ・成功させるために居残りをして私もみんなもとても頑張りました。正直最初は面倒くさいし帰りたい気持ちでずっとやっていたけど、当日終わったあとにとっても嬉しいことがありました。片づけをしている時に学年の先生に会い、とても褒めてもらい頑張った良かったと思いました。さらに事後アンケートに「家政科ありがとう」と書いてくれている人がたくさんいて、私たちが裏で頑張っている姿を見てくれているのだと思いました。これからは家政科が動くことがたくさんあると思うので、責任感を持って頑張りたいと思います。

## 4 成果

### (1) 災害・防災について学ぶ

- ・校外学習では、本格的な設備を体験したり企業の方の話を聞いたりすることで、専門的な知識を身につけることができ、生徒の深い学びにつながるとともに、活動の視野が広がった。
- ・習得した知識・技術を商品開発や佐用合同防災訓練などの地域での実践活動に生かし、地域貢献活動に還元することができた。
- ・知識・技術の習得だけでなく、地域住民の方や、多世代の方との触れ合いによって生徒のふるさと意識やコミュニケーション能力が向上した。

### (2) 減災week

- ・他教科に授業の実施を依頼することで、様々な視点から学校全体で防災について考える機会を作ることができた。

### (3) 佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～

- ・計画を進めていくうちに徐々にイメージが明確になっていき、積極的に発言をしたり、アイデアを出したりする生徒が増えた。
- ・外部の方々に来校いただいた合同会議では、それぞれの協働先からの協力を得ることで活発な意見交換ができ、生徒の発想を引き出すことができた。また、あえて教員主導の会議にせず外部講師に任せることで、生徒はコミュニケーション能力や企画運営力を大幅に向上させることができた。
- ・地域と協働で企画することで、地域社会とのつながりの重要性を生徒自身が実感することができた。
- ・地域と合同で防災訓練を行うことで、学校・地域全体の防災意識が向上した。
- ・取組の発表を行い、周囲から評価していただくことで、自信につながった。
- ・生徒自身が内容を企画することで、身に付けさせたい資質・能力であった「情報発信力」、「課題発見・解決力」、「企画力」、「プレゼンテーション能力」、「コミュニケーション能力」が大きく向上した。
- ・学校外での活動や多世代との交流が生徒の刺激となり、良いものをつくり上げたいという向上心や、成功させるために練習を何度も行うなど責任感が見られた。
- ・準備してきたことを楽しんでもらいたいというボランティア精神の向上も見られた。
- ・1年生に補助スタッフをさせることで、先輩の姿を見て学び、活動を継承していくモチベーションにつながった。

#### (4) その他

- ・令和4年度1. 17防災未来賞「ぼうさい甲子園」はばタン賞を受賞

### 5 課題

#### (1) 災害・防災について学ぶ

- ・佐用町の水害学習が学科内のみで留まっているので3年間を見通した講習会の計画を立てる。

#### (2) 減災week

- ・全学科の実施ができなかった。別期間であれば実施できたという学科もあったので、実施期間を2回に増やすなど、実施しやすいように見直しを行う。

#### (3) 佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～

- ・地域住民の方に当日参加していただくだけでなく、企画の段階から意見をいただき、地域が求める「災害に強い町づくり」に取り組む。
- ・家政科生徒のみが主体の活動になっているので、他学科にも参加を促す。

### 6 次年度に向けて

#### (1) 災害・防災について学ぶ

- ・他学科でも佐用町の水害学習を実施し、学校全体の防災活動に繋げる。
- ・3年間を見通した学習計画を立てることで、防災意識の定着を図る。

#### (2) 減災week

- ・年度当初に各教科に依頼し、年間指導計画を立てる。

#### (3) 佐用合同防災訓練～K I Z U N A大作戦～

- ・地域にアンケート調査を行い、地域が求める「災害に強い町づくり」に取り組む。
- ・普通科と農業科学科にも当日の体験で企画立案を依頼し、学校全体で防災訓練を企画できるようにする。

#### (4) その他

- ・地域の福祉施設と協働で地元食材を用いた防災食講習会を企画し、幅広い視野で食育活動に取り組む。
- ・商品開発の事業と横断的な取組として、保存食や非常食の開発をし、各イベントや防災訓練で販売活動を行い、佐用町の防災意識を高める。
- ・訪問サービスと連携を図り、健康上の理由などにより合同防災訓練に参加できない方にも訪問による体験学習を企画する。

## 【広報活動】

### 1 目的

関係機関など幅広い方々に認知・助言をいただき、生徒自身の振り返りによる深い学びと主体的な学びにつなげることを目的に、本事業の広報活動を行った。校外の広報活動では、生徒が自分自身の取組に対する聴衆の反応や広報の効果を直接体感することができ、取組に対するモチベーションの高まりにつながるとともに、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の向上を図ることもできた。

#### (1) 校内通信の発行

##### ① 作成と発行

日 時 令和4年4月～令和5年1月

場 所 本校パソコン教室

対 象 課題研究（情報）（家政科 2学年 情報コース選択者4名）

内 容

##### ○実施概要

地域との協働活動について情報発信をするため、生徒が一からレイアウトを考えて校内通信を作成し、アンケート調査で集めた生徒の感想や活動内容などを掲載した。作成にあたっては、文書デザイン検定やコンテストで得た知識を生かすとともに、読み手に分かりやすい記事の作成を目指して、活動中の多くの写真の掲載や色合い、構成など工夫を行った。



レイアウト検討①



レイアウト検討②



作成風景

#### (2) コンテストによる広報

##### ① 第2回全国高校生プレゼン甲子園決勝大会出場

日 時 令和4年8月20日（土）

場 所 ハピリンホール（福井県福井市中央1丁目）

参加生徒 家政科生徒（3学年2名）

内 容

##### ○実施概要

全国高校生プレゼン甲子園実行委員会が主催する「第2回全国高校生プレゼン甲子園」に参加した。予選では、「地域社会の持続可能性への提言」をテーマにプレゼンテーション動画を撮影し、審査の結果、応募数441校の中から予選通過10校に選出され、福井県で行わ



れた決勝大会に出場することができた。決勝大会では、「KIZUNA プロジェクト～つながりの輪～」と題して地域との協働活動に関する5分間のプレゼンテーションに加え、審査員から10分間の質疑応答が行われた。最終審査の結果、奨励賞を受賞するとともに、決勝大会の様子はYOUTUBEで配信され、本事業の広報にもつながった。また、決勝大会の出場に際し、審査委員長からZoomによる事前のオンラインレクチャーも受けることができ、生徒のプレゼンテーションに関する知識・技術の習得ができた。



オンラインレクチャー



決勝大会①



決勝大会②

### (3) 即売会での広報活動

#### ① 姫音祭

日 時 令和4年11月5日(土)  
 場 所 姫路城大手前公園  
 参加生徒 課題研究(食物)(家政科 2学年 食物コース選択者11名)  
 内 容 (商品開発参照)

### (4) 販売、展示活動

#### ① 高校生カフェ2022 in 平福

日 時 令和4年11月23日(水・祝)  
 場 所 お休み処 瓜生原  
 参加生徒 課題研究(食物)(家政科 3学年 食物コース選択者17名)  
 内 容 (商品開発参照)

#### ② 家庭クラブ活動

日 時 令和4年4月～令和5年3月  
 参加生徒 家政科全生徒(1学年38名、2学年24名、3学年35名)  
 内 容

#### ○ 実施概要

佐用町の特産品のPR活動を目的として、特産品を使った本校の開発商品である焼き菓子を販売した。各イベントに参加するにあたって、本校では生徒が当番制で焼き菓子の製作とラッピングを行い、販売をしている。販売活動では、地域の方に「頑張って」「おいしかった」などと声をかけていただき、生徒の自信につながっている。内容は以下の通りである。

行事名	日時	場所
佐用大収穫祭	令和4年11月3日(木)	佐用商店街
上月感謝祭	令和4年11月13日(日)	ふれあいの里上月
三日月収穫祭	令和4年11月20日(日)	味わいの里三日月
龍北工房定期販売	通年	龍北工房
ふれあいの里上月定期販売	通年	ふれあいの里上月



当番実習



販売の様子①



販売の様子②

### ③第44回兵庫県高等学校総合文化祭文化部合同発表会

日時 令和4年11月19日(土)

場所 神戸ハーバーランドスペースシアター

参加生徒 家政科生徒(2学年3名、3学年11名)

内容

#### ○実施概要

兵庫県高等学校総合文化祭に参加し、地域との協働活動や家政科の活動に加えて、佐用町の伝統産業である皆田和紙のPR活動を中心とした作品の展示、販売、舞台発表を行った。本校の活動を広く周知するとともに、兵庫県下の各地域の生徒と交流を図ることを目的とした。また、発表会の準備等を通して生徒同士が互いに刺激し合い、意見交換を行うことで、生徒のより主体的で深い学びにつながる活動を推進することができ、生徒自身の新たな課題を見つける機会となった。内容は以下の通りである。

展示	活動パネルと皆田和紙を用いた衣装の作品展示
販売	皆田和紙を用いたキーホルダー、カレンダーと焼き菓子の販売
舞台	兵庫県立西脇高等学校との合同ファッションショーによるドレスや皆田和紙を使った衣装の発表



学びの展示



作品販売



ファッションショー

## (5) 発表会

### ①第32回全国産業教育フェア青森大会

日 時 令和4年10月15日（土）、令和4年10月16日（日）

場 所 新青森県総合運動公園マエダアリーナ

参加生徒 家政科生徒（2学年2名、3学年3名）

内 容

#### ○実施概要

青森県で開催された産業教育フェアに参加し、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」について3年間の実施内容や成果の発表、展示を行った。また、会場内では皆田和紙を使った小物作りのワークショップを実施し、地元の子どもたちなど多くの方に参加していただくことができた。



発表



展示



ワークショップ

### ②地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）研究成果発表会

日 時 令和5年1月22日（日）

場 所 さよう文化情報センター

参加生徒 家政科生徒（1学年38名、2学年24名、3学年35名）

内 容

#### ○実施概要

本事業の成果を地域に広報することを目的に3本柱ごとにまとめて地元施設で発表会を行った。発表会は一般公開とし、今までの取組の成果物や活動内容をまとめたパネルの展示及び説明を行い、3年間の事業内容について幅広く情報発信を行った。成果発表や展示説明など生徒が自ら行うことで活動の振り返りやまとめを行うことができるとともに、各委員の方々から専門的な視点で助言をいただくことができ、主体的な学びを促すことができた。以下は当日の流れと内容である。

時間	内容
9:00～ 9:10	受付、展示見学
9:10～ 9:35	開会行事
9:35～10:50	代表者による研究成果発表会 ・事業概要（学校紹介、佐用町について、研究目的、実施体制） ・実践内容（特産品による商品開発、健康寿命の延伸、災害に強い町づくり）



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成果と改善の方向性</li> </ul> <p>講評</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・兵庫教育大学 永田 智子 先生</li> <li>・島根大学 作野 広和 先生</li> </ul>
10:50～11:00	閉会行事、展示見学



研究発表



パネル展示



来場者に作品説明

### 【講評】

○兵庫教育大学 永田 智子 先生

- ・充実した素晴らしい発表である。
- ・家庭科の目標は「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家族や地域の生活を創造する資質・能力を育成する」である。実践的・体験的な学習活動が家庭科で最も大切であり、高齢者訪問等は実践的な活動である。先生に言われて行う体験だけでなく、生徒が企画して運営した実践的な活動が素晴らしかった。
- ・企業の方、高齢者の方、子ども達と協力して学習活動を行った。他の学校では経験できないとても貴重な経験であり、これからの時代にコミュニケーション能力はとても大切である。
- ・昨年の発表の時に「地域の活性化は何か」「どういう風になったら活性化したと言えるか」という問いに「地域の活性化とは、様々な世代との関わりや繋がりである」と答えた。その中で問題を発見してどう解決するかについて工夫してチャレンジし、評価したことが素晴らしい。
- ・「主体的に家族や地域の生活を創造する資質能力を育成する」は大切な目標であり、本事業は目標設定以上の能力育成に到達している。
- ・主体性には2つある。1つは学習授業の活動の中で、設定されたことに一生懸命取り組むこと。もう1つは卒業してからも良くしていこうという気持ちを持ち続け、継続すること。卒業しても地域の生活を良くしようとする態度を持ち続けて欲しい。

○島根大学 作野 広和 先生

- ・プレゼンテーションが非常に素晴らしい。プレゼンテーションが年々上手になっている。
- ・テーマを限定してスパイラルに深化している。3つのテーマで空間的にも徐々に広げて、深化が伝わる発表である。
- ・生徒として学ぶのは当然であるが、地域の一員、日本国民の一員として活動していることが非常に印象的である。
- ・1年目は提案や思考、2年目は実践、地域の方や行政と協働して行うことはよくある。3年目

は地域課題を解決するために取り組んでいた。地域そのものに参画している。

- ・今後の可能性、見通しを提示している。プレゼンテーションの最後の部分で、やりっぱなしで終わらないことは評価できる。生徒自身が具体的に「佐用を笑顔に」と表明したことは非常に素晴らしい。真価が問われるのは卒業した後である。どの進路でも受け身ではなく、自分自身で判断して選択することが多い。学習したことを活かすのは当然であり、自身の成長に紐づけてより良い社会を築いていく主体になって欲しい。
- ・高校は同じ学年と属性で、仲間がいて楽しく活動し学べる。社会に出たら一人である。一人でも主体的に実践する「自走モード」で学びと成長を社会人になっても続けることを願う。

#### 【生徒の感想】

- ・展示されていたパネルや作品は先輩方の努力がしっかり伝わってきて内容や工夫などが一目見てすぐ理解できるくらいきれいで分かりやすかったです。先輩たちはいろいろな取組や経験をしてきたんだと思いました。パネルに載っている説明だけでなく、質問も詳しく答えてくれて、来年度の活動に興味を持ちました。(1学年)
- ・先輩たちの発表はきれいにまとめてあって内容も分かりやすかったです。発表を聞いて、先輩たちはとても熱心にこの活動に取り組んでいたことがわかりました。発表の中に私たちが参加した取組も紹介されていて、佐用高校家政科の一員として参加できていると実感しました。来年は先輩方がしてきたことを引き継ぎながら、自分たちでより良いものにしていきたいです。(2学年)
- ・私達が今まで行ってきた地域協働活動とその成果を多くの方に知っていただくことができ良かったです。講評を受けて、「良かった」と言ってもらえたことはとても嬉しく、昨年との比較もあったことにより成長できたことを感じられました。今年で文部科学省事業としての3年間も終わり、私たちもう卒業しますが、これからも佐用町のために何かしたいです。(3学年)
- ・パネルは時間をかけて作ったため、多くの方に見てもらえて嬉しかったです。パネルの発表では、相手に伝わるよう話すことがとても難しく感じました。しかし、見に来られている方に、私たちが作ったレシピ本を参考に「今日の晩御飯を作る」と言ってくださった方がいて、とても嬉しく、達成感を感じました。(3学年)

#### ③高校生 SDGs 探究発表会

日 時 令和5年2月5日(日)  
場 所 兵庫県立兵庫高等学校 講堂  
参加生徒 家政科生徒(3学年3名)  
内 容

##### ○実施概要

兵庫県教育委員会主催の「高校生 SDGs 探究発表会」に参加し、地域との協働活動についてパネルディスカッション及びポスターセッションを行った。パネルディスカッションでは、「探究の自覚化—何のための探究か—」をテーマに地域との協働活動における探究活動の意見交換を行い、ポスターセッションでは、地域との協働活動の3年間の取組について発表した。参加生徒は発表や質疑応答を堂々と行い、コミュニケーション能力やプレゼンテーショ

ン能力の向上を実感するとともに、他校生徒の取組を知ることで、深い学びにつながった。



パネルディスカッション



ポスターセッション①



ポスターセッション②

#### ④ 76回生 課題研究発表会

日 時 令和5年2月10日（金）5、6限

場 所 本校保育大教室

参加生徒 家政科生徒（1学年38名、2学年24名）

内 容

##### ○実施概要

76回生（2学年）の課題研究発表会を校内で実施した。地域との協働活動にご協力いただいた方々を来賓に迎え、評価と講評を行っていただき、生徒自身が活動を振り返る機会となった。また、本事業の継承を目的として1学年も発表会に参加し、来年度の活動への意識付けを行った。